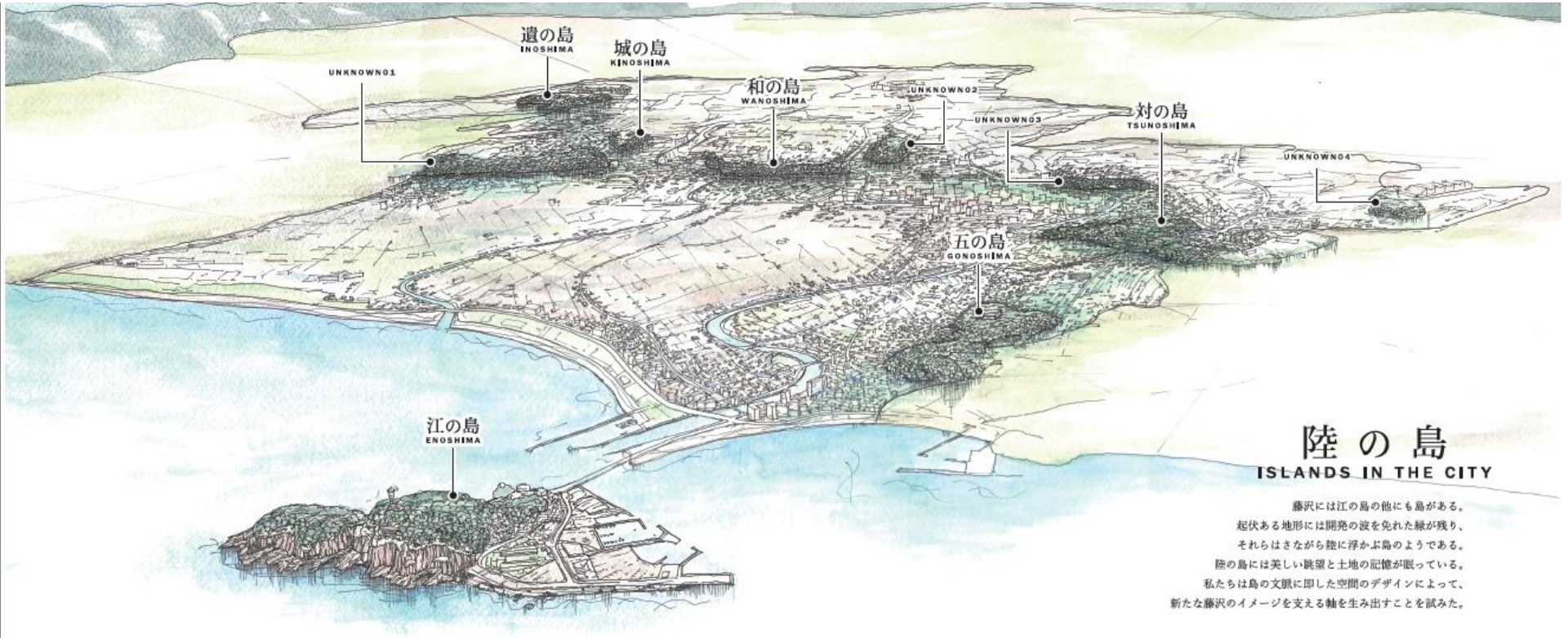


陸の島
ISLANDS IN THE CITY

藤沢には江の島の他にも島がある。
起伏ある地形には開発の波を免れた緑が残り、
それらはさながら陸に浮かぶ島のようである。
陸の島には美しい眺望と土地の記憶が眠っている。
私たちは島の文脈に即した空間のデザインによって、
新たな藤沢のイメージを支える軸を生み出すことを試みた。

01. 陸の島とは

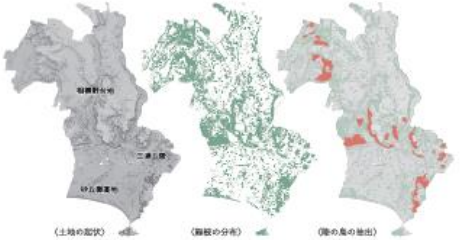
陸の島：伊勢山のスケッチ。まとまった緑が目を引く

拠点場としての陸の島：片瀬山から望める風景のスケッチ。木々の間から江の島が見える。

藤沢において江の島は卓越した存在である。湘南海岸に突き出たこの土地は古くから参詣、避山の地として広く知られ、海辺のまちとしての都市のイメージを形作ってきた。内陸にはこれに匹敵するような際立った土地は見られないが、私たちは陸にも島を発見した。「陸の島」とは周囲を人工物で囲まれ内部は緑で覆われた高地であり、まるで灰色の海に浮かぶ島のように見える土地である。

すべての陸の島は、視対象としての可能性と視点場としての優位性を持つ。過密な市街地に浮き上がるまとまった陸の島の緑は誘目性を持つため、島自体が視対象になり得る存在である。同時に、低地の市街地においては四方を構築物に囲われ見通しがきかない状態がほとんどであるが、陸の島の上からは藤沢のまちと江の島や富士山といった象徴的な対象物を一望することができる。陸の島は、今は特に意味のある土地として認識されていないが、大きな価値が眠る場所である。

02. 陸の島の分布



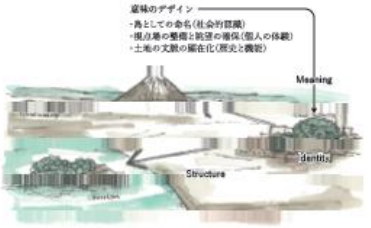
陸の島の位置は「土地の起伏」と、「緑被の分布」から導くことができる。

土地の起伏を見ると、藤沢市を南北に大きく分ける相模野台地と境川東部に位置する三浦丘陵の縁辺部に大きな高低差が存在し、相模野台地は引地川周辺が谷地形となっている。南部の海岸平野には顕著な高低差は見られないが、縄文期の海砂の堆積によって形成された砂丘列が微高地を形成している。

緑被の分布を見ると、市全体にまばらに存在し、御所見、湘南大庭、片瀬地区にまとまった規模のものが見られる。

藤沢市内における陸の島は、北部には慶應義塾大学SFCといった谷戸に囲まれた相模野台地上の土地、南部には伊勢山緑地などの相模野台地及び三浦丘陵の縁辺部と海岸平野の砂丘列の一部として存在し、南西から南東にかけて連続して分布していることが分かる。

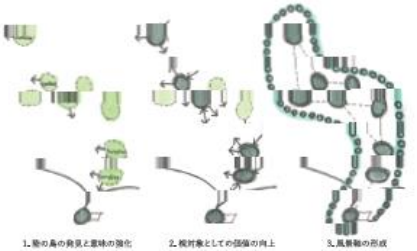
03. 意味が高める島の価値



ケヴィン・リンチは1960年の著書「都市のイメージ」において、環境のイメージはアイデンティティ：個別性、ストラクチャー：構造、ミーニング：意味の3つによって成り立つとした。彼は分析の初期段階ではミーニングを切り離して考えることも有用であるとし、アイデンティティとストラクチャーのみを解説した。ハード整備を中心に置いてきたこれまでのまちづくりもこの2つを主題として扱ってきたが、成熟した現代の都市の風景を捉えるとき、ミーニングの果たす役割は大きい。

「陸の島」の環境のイメージは、人工物から浮かび上がる緑のまとまりとしてのアイデンティティ、島の位置関係としてのストラクチャー、社会的認識やそこでの個人の体験、土地の歴史といったミーニングによって成り立つ。私たちはこの内のミーニングの強化を主目的として捉えた。そのため、大規模な形態の操作や都市構造の改変は行わず、小さな施設整備や景観阻害要因の排除によって島の価値を高めることを試みた。知らない土地から眺望の名所へ、緑の丘から陸の島へ、小さな整備が意味を生み、意味が島の価値を高めていく。

04. 風景軸：島がつなぐ藤沢の風景



1.陸の島の発見と意味の強化　2.視対象としての価値の向上　3.風景軸の形成

意味が変われば風景が変わる。ふとした瞬間に内陸から見える江の島に我々が視線を向けるのは、その高い歴史や海辺の観光地といった意味があるからであり、富士山への眺望の価値には日本一の山としての意味が大きな役割を果たしている。このように、風景の価値は視対象の持つ意味と密接な関りを持つ。もともと緑のまとまりとしての誘目性をもつ陸の島は、空間の改変により居住者や来訪者にとって意味の深い土地となり、その視対象としての価値も向上する。

南北に連続して分布する陸の島が視対象として成熟し、ランドマークとなると藤沢に「風景軸」が形成される。風景軸とは、陸の島通しのイメージ上の結びつきであり、臨海部から内陸部までの都市のイメージを鮮明にする強固な骨格である。今までの藤沢は江の島という卓越した存在によって海辺のまちのイメージが強かった。風景軸はまちのイメージ領域を北部までつなぐ、新たな南北軸である。

05. ケーススタディ

ここでは、風景軸を形成する除の島を南北踏たりなく5箇所抽出し、ケーススタディを行った

除の島平面図　S=1:5,000

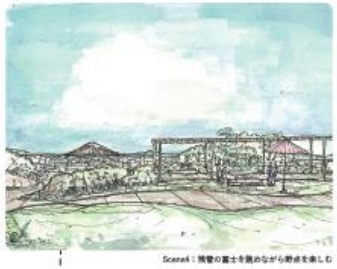
0　50　100　250m

和の島
WANOSHIMA

〈Survey〉和の島は伊勢山緑地を含む、面積5.4ha、高低差35mの土地であり、観光者を駐車し、平和を祈念する場所である。相模原台地の南端に位置し、島の東側には小田急線、北側には国道1号線が走り、南側には旧東海道が通っている。島周辺は低層住宅が多く、内部にも住宅が存在する。島の頂上東部には広場が整備されており、木の間から江の島が見える。広場にはサクラ類が多く植樹されており、観光者駐車場が4箇設置されている。4月初旬には駐車場の前で駐車祭が執り行われ、観光者や家族が参列し平和を祈念している。鐘楼にはかつて「時の鐘」と呼ばれていた梵鐘が吊るされていたが、戦争時の金属供出の影響で今は残されていない。

〈Design〉この島が平和を祈る場所としての意味を持つことに着目し、戦争の無残な記憶が残る鐘楼に平和の鐘を復活させ、祈りの鐘の音を藤沢のまちに響かせるための視点場のデザインを行った。Scene1：鐘楼に登ったときに江の島を眺望できるよう広場南方の樹木を切り開くとともに、広場空間の舗装をすべてサクラ類に変えることで、サクラに囲まれた中で平和を祈れる場を創出する。

Scene1：満開のサクラのなか平和の鐘から江の島を望む



Scene4：満響の富士を眺めながら野点を楽しむ

Scene5：当時の主郭を想わせる四阿屋の休憩所から江の島を望む

城の島
KINOSHIMA

〈Survey〉城の島は大庭城址公園を含む、面積5.4ha、高低差30mの土地であり、今なお城があった痕跡を残す島である。島の東側には引地川、西側には小糸川が流れており、北西側は低層住宅、南東側は田畑が広がっている。島の西部からは富士山、南部からは江の島が眺望できる高さを持つが、現在では樹木によって視線が遮られている。平安時代末期の山城である当時の大庭城は、南から主郭、二郭、三郭、四郭という構造であり主郭から南側が見渡せるようになっていた他、郭の間には土塁や堀が築かれていた。

〈Design〉かつてこの島の上部に大庭城が築かれていた歴史に着目し、当時の光景を想起させる視点場のデザインを行った。Scene4：北西のエントランス部の斜面林を取り除き富士山への視線を確保することで、かつて見張りの役割のあった四郭に見晴らしの良い視点場を生み出す。Scene5：南部の斜面林を取り除き江の島への視線を確保するとともに、当時の主郭を想起させる四阿屋の休憩所を設置する。

五の島
GONOSHIMA

〈Survey〉対の島は新林公園を含む、面積66.9ha、高低差55mの土地である。太古の時代には江の島とつながっており、ちょうど両端の関所にあった島である。三浦半島の北西端に位置し、島の西側には境川が流れ、周辺には低層住宅地が広がっている。島の西半分は総合公園であり、園内には古民家や田んぼ、急勾配のハイキングコースなどが存在し、バードウォッチングが行われている。島のエントランスである南側の片瀬山北公園から南西境川方向には、500mを超える空地が連続して延びている。

〈Design〉大庭城の島とそこから延びる連続したオープンスペースという形状に着目し、海の風光拠点である江の島の対となる新たな除のレクリエーション拠点として整備する。Scene2：内部の田んぼで農体験、池や森林での自然観察などのソフト展開を行うと同時に、江の島のシーキャンドルに対する展望台「ランドトーチ」を創出する。江の島や五の島を望かな眺に囲まれながら一望できる視点場をデザインした。

Scene3：島南西の連続する空地を、江の島における江の島大橋に見立て、緩やかな歩行空間として整備することで、対の島へのアプローチ空間「対の島大橋」を創出する。車道にかかる区間はブリッジで処理し、既存空地の区間は河畔が季節の植物で楽しめるような少行者専用空間とした。また橋の南端は境川に接続しており、江の島との舟での行き来も可能である。

Scene2：ランドトーチからは対の島の豊かな自然に囲まれた五の島、江の島が見える

Scene3：アプローチとなる対の島大橋を振り返ると藤沢の市街を一望できる

対の島
TSUNOSHIMA

対の島ルート断面図
S=1:2,000

〈Survey〉五の島は片瀬山公園を含む面積23.5ha、高低差40mの土地であり、五つの頂上部をもつ島である。片瀬山の南端に位置し、周辺は低層住宅地であり、日蓮宗の寺院が散多くみられる。島の南部には龍口寺が、山頂には仏舎利塔や五重塔が建てられている。境内北側には片瀬山公園が存在し、うっそうとした樹林の隙間から江の島や海が見える箇所が存在する。境内と公園の間にはフェンスが張られ行き来することはできない。また、江の島と片瀬山には天女と五頭龍の伝説が残されており、五頭龍が絶命する際にこの先もこの地を見守ることを約束し、片瀬山となったと言われている。

〈Design〉この島の複雑な起伏と、5ヶ所の頂上部がある形態に着目し、頂上部を伝説の数の5つの丘に見立て、それぞれ違う方向を眺望する視点場のデザインを行った。Scene6：島中央の頂上部は、樹林を遮る樹木を取り除くことで、龍口寺の本殿と五重塔を眼下に望み、それと対峙する江の島を眺める拠点場とした。Scene7：島北東の頂上部は対の島までの通路をとり込む広場として整備する。その他の3つの頂上部については、富士山やほかの除の島を望む視点場とする。5つの頂上部はそれぞれの空間個性に応じた活動が行われ、五の島を回遊することで様々な使いこなしの風景に出会うことができる。

Scene6：江の島と龍口寺の伝説上のつながりを感じ感じられる眺め

Scene7：屋外イベントも可能な広場。対の島までのビスタが人の流れを生む

Scene8：富士山が見えるカフェレストラン

〈Survey〉遺の島は慶應義塾大学湘南キャンパス一帯を含む、面積42.1ha、高低差20mの土地であり、歴史的な痕跡が複数遺る島である。島の北東側から南西方向に小出川が流れており、周辺には田畑が広がっている。島中央西部の小さな丘陵には富士浅間神社が存在し、島東部の下末吉段丘面には樹林が残されている。島中央には慶應義塾大学の研究棟が並び、島の西部からは富士山を眺望できる。また、島の西部には縄文時代の堆積層の崖が存在することから、縄文人の生活の場であったことが分かる。富士浅間神社は江戸時代の富士山大噴火によって堆積した火山灰を集めた丘陵の上に建てられている。

〈Design〉この島が縄文時代の生活、富士山噴火という二つの痕跡を残している点に着目し、それらの歴史を同時に感じられる視点場のデザインを行った。Scene8：富士浅間神社の西側にある空地に、縄文時代の住居のように地面を掘り込んだカフェレストランを計画する。火山灰が堆積してできたかのようなドーム型の外観で、内部には西側の開口部から薄明い店内へと富士山の景色が光を浴って飛び込んでくる風景を創出した。近くの学生も日常利用できる空間である。

遺の島
INOSHIMA

遺の島ルート立面図
S=1:500

ふじ ぽた

Fujisawa pottering

～ポタリングを通して 藤沢愛を育む～

コンセプト

「ふじぽた」とは藤沢市で行うポタリングのことである。
「ポタリング（pottering）」とは 'のんびりする' 'ぶらつく' 意味の英語「potter」に現在分詞や動名詞を示す接尾辞「-ing」を付けた造語であり、自転車を用いる「散歩」的なサイクリングをいう。

現在、藤沢市には活用されていないサイクリングコースがある。
そこで、主題である南北の軸を活性化させるために、現況のサイクリングコースを組み込みつつ、3つの提案をする。

ポタリングを成立させ 南北軸を創る 3つの提案

- 藤沢全体を回遊できる A.ポタリングコース
- 藤沢らしさを取り入れた、引地川親水公園を中心とする B.ポタリングシステム
- みんなで創る、新たな藤沢回遊ポタリングロード C.新たなふじぽた

現況調査

現在、選定されたサイクリングコースでは藤沢市全体を回遊することができない。

引地川には断続的にサイクリングコースがあり、北部へ行くための方法がないため、御所見地域などに向かうことが難しくなっている。

境川には川沿いにサイクリングコースが設定されているが、引地川へのアクセスに乏しい現状がある。

それぞれのサイクリングコースの持つ特徴や、魅力を分析し、さらに私たちの調査データを加えることで、藤沢全体を回遊することができるサイクリングコースが見えてくるのではと考え、提案する。

市内には大小さまざまな公園があるが、サイクリングコースには組み込まれていなかった。

現況のサイクリングコース

A.ポタリングコース

藤沢をのんびり、ぶらっと回遊するためのサイクリングコースのこと。
公園やグラウンドなど、広い土地がある公共の場などを周るものとした。

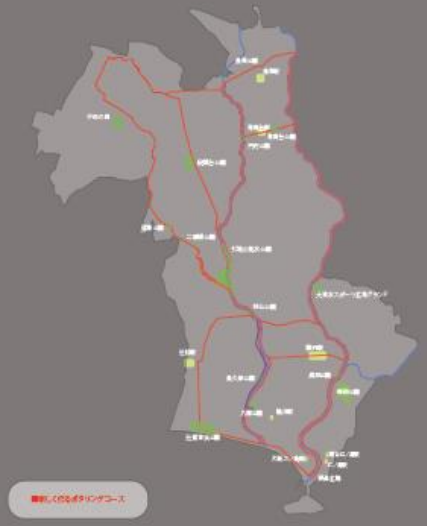
■選定した場所

・長後駅、湘南台駅、藤沢駅、鵠沼駅、湘南江ノ島駅、江ノ島駅、片瀬江ノ島駅、辻堂駅（8箇所）
・引地川親水公園、柏山公園、二番橋公園、遠藤公園、秋葉台公園、円行公園、湘南台公園、長後公園、長田公園、大清水スポーツ広場グランド、新林公園、八部公園、長久保公園、辻堂海浜公園、洲鼻広場、少年の森（16箇所）

・川沿いに設定した場所はそのまま川と隣接方に進むことができる。
・駅前に設置することで人が多く利用し電車から降りてすぐ自転車を借りることが出来る。
・洲鼻広場は3つの駅（片瀬江ノ島、江ノ島、湘南江ノ島）から近い。
・駅前に近い公園（長後公園、湘南台公園の二つ）は駅前のステーションが使えないときの予備的に設置。駅前の自転車ステーションは使う人が非常に多いと思われるので、もしそこが使えなかった時用の場所としている。
・その場所自体に大きな魅力があり、多くの人が訪れるであろう場所
（引地川親水公園、長久保公園、新林公園、辻堂海浜公園）
・運動・スポーツを目的とした公園（八部公園、秋葉台公園、大清水スポーツ広場グランド）

引地川親水公園

境川



提案するポタリングコース

B.ポタリングシステム

藤沢は、江ノ島などの地形的特長から、サーフィンやサーフボードの上に立ち水面を漕いで移動するＳＵＰ＝Ｓtand Up Paddle などのマリンスポーツが盛んである。これらに様々な趣向をこらしたポタリングツールを加えることで新たなアクティビティとしての３つのポタリングシステムを提案する。

「やまぽた」 坂や緑の多い北部

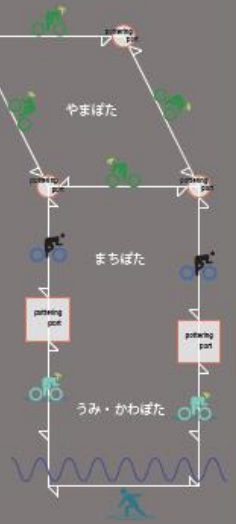
少年の森

「まちぽた」
引地川親水公園一帯の地域の中央部

東海道本線高架下

「うみ・かわぽた」
海に近く、河川を利用する南部

砂浜からの江ノ島



～ポタリング ツール～

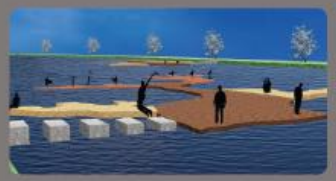
北のやまぽたでは工夫をこらした面白自転車 「やまチャリ」
引地川親水公園付近のまちぽたではシティサイクル 「まちチャリ」
南側、うみ・かわぽたでは、ボードを意識した融合自転車 「かわチャリ」

B. ポタリングシステム ～ポタリング ポート～

さまざまなアクティビティを交差させ、スムーズに藤沢市全体でポタリングを行うために、「拠点」となる場所＝ポタリングポートを設置する。
基本的に３つの規模を想定し、大きさによって利用形態が異なる。
・引地川親水公園に設置する、「クロマツ」をモチーフにしたもので、人が溜まる場もかねている。
・奥田公園付近の境川に設置する中規模のもの。自転車とＳＵＰの乗り換え場となっている。
・ポタリングコース内には、休憩所としてベンチなどを設ける。

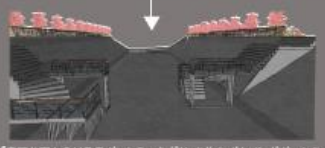
・引地川のポタリングポートの提案

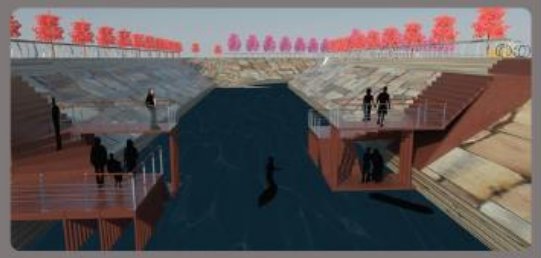
市の木にも選ばれていて、藤沢に緑深い木「クロマツ」をモチーフにしている。
市の木のマークとしてのクロマツを「幹」と「枝」、「葉」の３つにわけ、それぞれに違う用途を設定した。
・「幹」メインデッキとして基準となる高さとなっている。
・「枝」高低差をつけることによって、それぞれをつなぐ通路の役割を果たす。
・「葉」は人がたまる場所とし、低い「枝」の先端付近のくぼみに乗り降りした人やサーフボードが集まることで表現した。



・境川のポタリングポート提案

引用：google earth



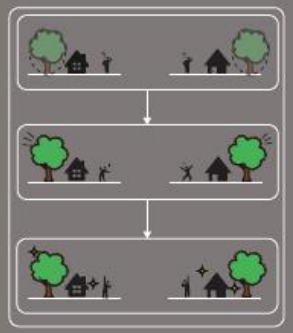


「奥田公園とＳＵＰスポットのつながり」を生むポタリングポートを設定する。
親子で一緒に奥田公園で遊ぶ時に、公園とＳＵＰスポットがつながることで川の水辺に並ぶみどりを川から楽しむことができる。
ポタリングをする人は、複数の乗り物を乗り換える場として利用することができる。

C. 新たなふじぽた

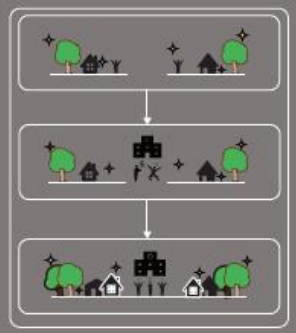
ポタリングコースを利用する「藤沢回遊ポタリングコース＝ふじぽた」を市の教育委員会が企業と連携し推奨し、小中学校の学習プログラムの一環とする。
市内の小中学校の道徳や学活などの時間を利用し、学年の推移にあわせて段階的に藤沢を知ってもらうのが目的となっていて、プログラムは３段階構成になっている。

stage１　～地域に光るキラキラ探し～



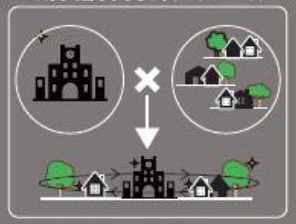
藤沢市内の小学生を対象としている。各小学校区内で児童たちが普段何気なく見ているものを、「宝探し」や「冒険」といった単語を関連させ、新しい視点を形成し、地域の魅力を探す。

stage２　～さらに広がるぼくらのふじさわ～



中学校にあがった生徒を対象としている。一般的に複数の小学校区から中学校区は成り立つ。別の小学校区出身の生徒に、自分の区域の魅力を教える。そうすることで自分の知らなかった藤沢の魅力をさらに知ることができる。

stage3
～みんなで創るふじさわポタリングコース～



地域の大学と連携し、藤沢全体をめぐる。若い藤沢市民＝児童や生徒の藤沢に対する地域への愛や、父兄に始まる一般の方の地域愛を深めることを目的とし、企業や大学と共同で、新たな「ポタリングロード」を提唱していく。これまで集めてきた資源を再整理し、マッピング。市が公園で行うイベントなどでも、一般の方にヒアリングを行うことで情報の共有を図る。それらの情報も組み込みつつ、学生と児童、一般の市民が一緒に考え、新しいコースを提案する。

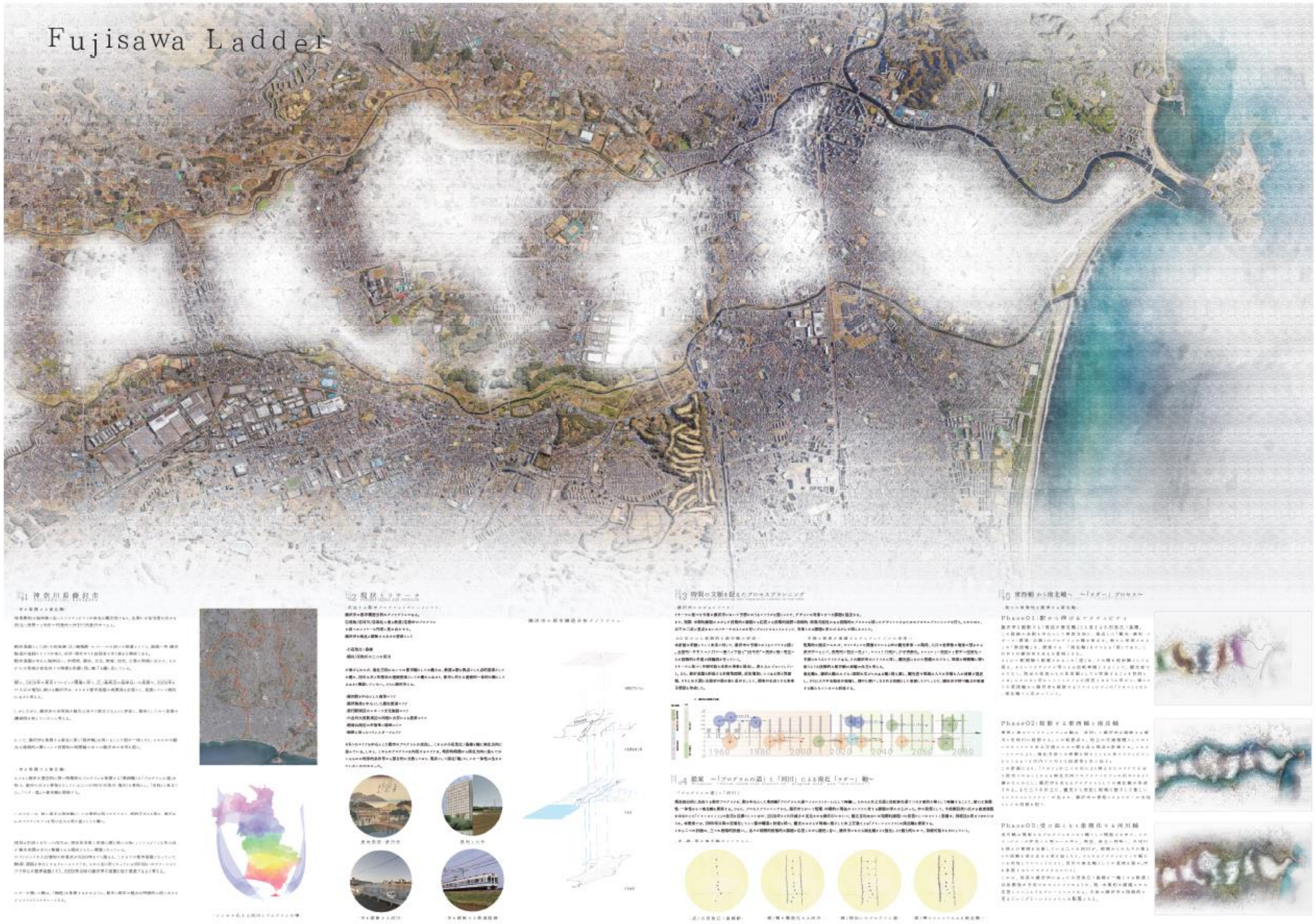
中学校区及び提案したポタリングコースの関係

～その後～

現地でコースを示すラインにはコース作りに参加した人の名前を刻むプレートを設置し、将来的に大人となった子供たちが参加できるようなイベントにしていく。
地域に名前を残すような形で市民に還元していく。

自分たちの創っていくものが、地域の魅力のひとつになっていく。そういった共有体験をした児童たちが大人になったときに、一種の「藤沢あるある」となって感慨深い気持ちに浸ることも、あるのではないだろうか。

花桃祭りまでの道


Fujisawa Ladder

東海道路にのびる歴史街道の再編
地域と観光に開かれたスポーツ・文化エリア
地域住民・大学と連携した農作物直売所

観光開水としての船着場
地域に根ざした緑地と水辺空間
サイクリングロードと水辺空間

農業軸
農業エリア
農作物直売所
水上交通
軸の結節点
農業体験場
軸の結節点
スポーツ施設
公園
スポーツ軸
水上交通

WATER LINKED CITY

CONCEPT

南北軸の川を端緒とした緑のみち

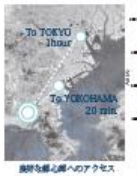
藤沢ではかつて水辺と生活に密接に関わっていた。しかし人口増加による宅地開発や水害の防止による護岸整備などによって水辺と人々の関係は希薄になっている。そこで本計画では川辺や海辺再整備するとともに、藤沢を南北に流れる川を軸と捉え、川を端緒とした緑のみちを市街地に提案する。それらは既存の施設や公園などの周辺環境に応じて設計される。商業地域には店の一部として、大学近辺には学生や住人の生活空間の延長として利用されていく。同時に緑のみちは、住宅密集地区や再開発地域においては雨水の排水、川沿いでは自然避防、海辺では防風・防砂機能を果たす。更に、水辺を軸とした都市のモデルを示すことで湘南地域全体をより魅力的にしていくことを目指す。

コンセプトダイヤグラム

VISION for SHONAN

藤沢を筆頭に相模湾に面する湘南の都市は、山や台地、南北に長い川、海を持つ。とくに藤沢は人口が集中し都市化が進んだ結果、水辺と都市の関係が希薄になっている。本提案は都市と水の関係をモデルとして示すことで、湘南地域全体を魅力的にすることを目指す。

URBANIZATION



藤沢駅を起点へのアクセス

2030年まで増加する人口

藤沢は湘南地域において最大の人口を有する中心都市である。江戸時代は宿場町・門前町や江の島詣の足場、戦前は別荘地、戦後はニュータウンとして都市開発が進んだ。東京や横浜への主要通勤エリアであるが、山や海などの自然が多く快適な居住環境が特徴。藤沢では人口増加が進んでおり、2030年以降も人口減少率が低いため辻堂駅や工場跡地などを中心に再開発が多数行われている現在進行形の成長都市である。

CULTURE with WATER

東海道五十三次に描写されるように、藤沢は古くから水の街であった。現在も片瀬・鵠沼・辻堂・江の島など著名な海岸を多く有するが、海辺空間は砂浜のみであり親水空間の機能や施設は乏しい。また都市部の川はほとんどがカミソリ護岸で覆われている。藤沢の生活は水辺が重要な位置を占めていたが現在は空間に課題がある。

WATER RELATED RISK

藤沢を流れる川は氾濫が多いことで有名であった。護岸整備がすすめられたが、都市開発に伴って森の減少や地面の舗装によって保水機能が低下し水害リスクが高まっている。更に近年は異常気象による神経、温暖化の進行による高潮や台風の増加が想定されている。都市部における防災対策が急務であると考えられる。

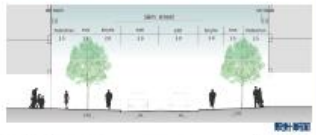
過去の浸水被害・津波想定

木のデッキを用いた海辺の空間

湘南台エリアの現状　駅西での活動が少ない市街地
車線が多く歩道は狭い。駅西では店の活動は制限されている。

NEWTOWN
無機質なニュータウンの憩いの場

川に挟まれる市街地において３車線以上の道路を再配置する。既存商業を繋ぐように緑道を配置し人々の活動を促す。周縁地では１車線分が店の溢れ出し空間として利用される。更に緑地は雨水の貯水を助ける。

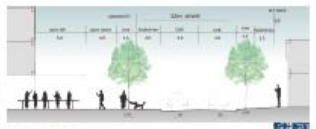


駅前後の街区

大学エリアの現状　住宅地から孤立した大学キャンパス
大学がエリアの大部分を占めるが、高い塀によって住宅地から孤立。

UNIVERSITY
街を囲む大学から川への輪

大学を囲む塀を撤去、オープンスペースとして学生と地域で利用する場所とする。直営野外ラボを開け、街では研究として大学の活動を行い、川辺で市民とともに調査を行う。自然が豊かな大学街のモデルにしていく。

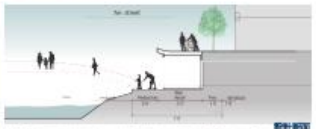


駅前後の街区

藤沢駅エリアの現状　市街地における利用されない川辺空間
駅付近の川は高い塀とカミソリ堤防に囲まれている。人通りも少ない。

DOWNTOWN
川と湿地を取り込んだ市街地

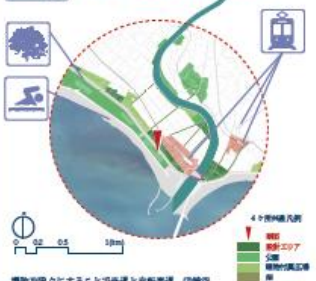
周辺の文化施設や市役所のオープンスペースと一体になった緑地空間を設計する。障害する大型道路に交通を集中させ、車道を廃止する。また自然湿地は貴重な生態地になる。



駅前後の街区

海辺エリアの現状　少ない海辺の空間利用性
歩行者や自転車から海は見えない。樹木が場所は強い海風が吹き込む。

SEASIDE
日常的に海を楽しむ人々の生活



湿地を狭くすることで歩道と自転車道、緑地空間を設けると共に、市街地と海の視覚のつながりを作る。駐車場は地下、地上を公園・防風林とする。

駅前後の街区

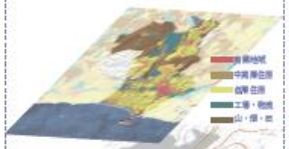
藤沢駅近辺の川辺

DESIGN NODES & ANALYSIS

4DESGIN NODES
以下の分析から詳細設計を行うエリアを４ヶ所抽出した。都市開発が進む湘南台、日本大学近郊、中心街の藤沢駅、臨海部の湘南とする。水辺と合わせて市街地の道路を計画することで、エリア全体に新たな人の流れを生み出す。

LAND USE
山間部や畑以外に、住宅地と商業地が密集

市街地を中心に設計



TRANSPORTATION
南北に複数の電車と国道
東西は方向は少ない

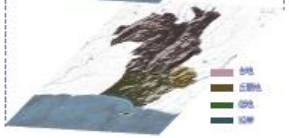
南北軸から東西へ設計

HAZARD AREA
川・海沿いに浸水域
市街地も浸水域に新高

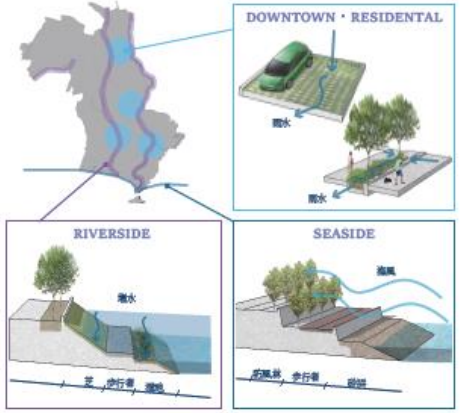
市街地の浸水域を設計

TERRAIN
台地、丘陵地、低地、沿岸
異なる質の地形と地質

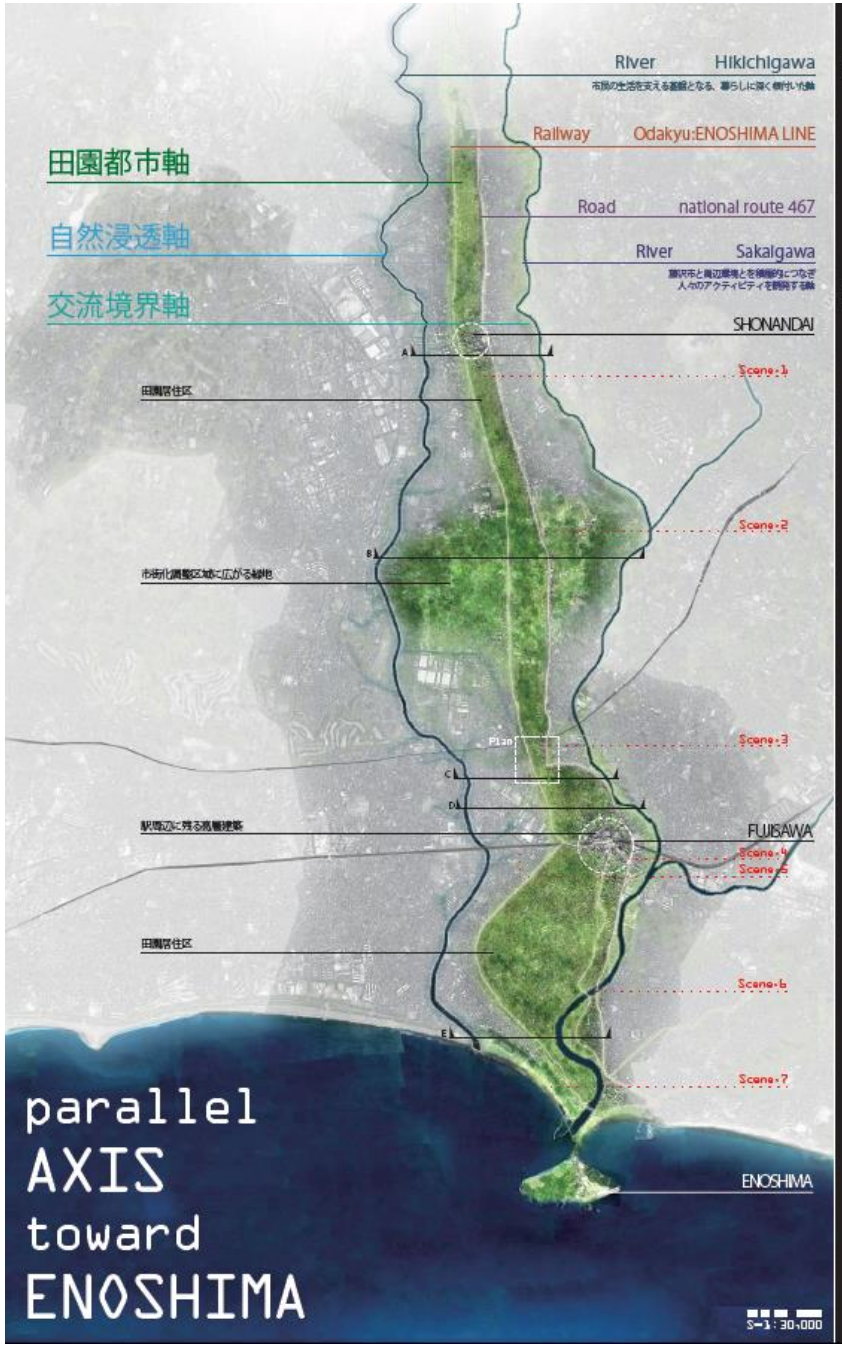
各々に個別の設計



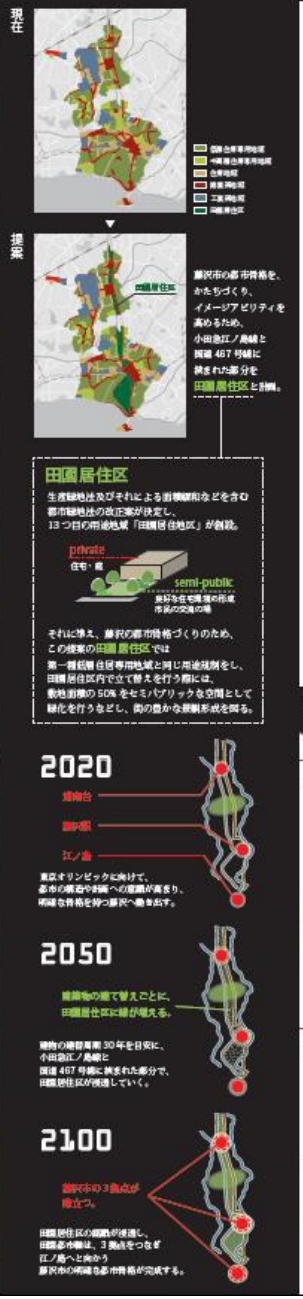
DISASTER MANAGEMENT



都市部には山や畑がないため水害時の土や植物による保水機能が脆弱である。本計画で設計された日常的に利用される開放空間や駐車場、親水公園が減災に役立つ。市街地では雨水や浸水時の吸水と排水、川辺では吸水及び幅の広い堤防、海辺では防風・防砂林及び津波の威力を減衰させる機能を果たす。



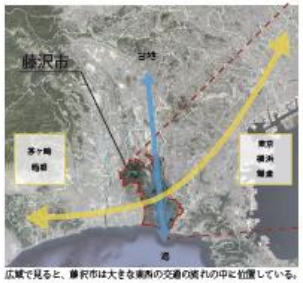
PROCESS



SITE and ANALYSIS

藤沢市

神奈川県南部に位置し、周囲を6市1町（横浜市、鎌倉市、茅ヶ崎市、大和市、綾瀬市、海老名市、寒川町）に囲まれる。
人口42,7501人（4月1日時点）。
東西距離は6.55km、南北距離はその約2倍の12km。
市内には JR、私鉄、地下鉄、モノレールが通り、東京まで約50分、横浜まで約20分と利便性が高い。



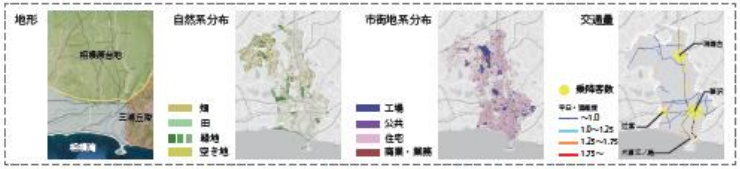
広域で見ると、藤沢市は大きな東西の交通の流れの中に位置している。また地形的には、高いところ（台地）から低いところ（海）へと、南北の自然の流れとして川が通っている。

小田急江ノ島線と国道467号線という市内の主要動線が南北に通っている。

市内で2番目に利用者が多い湘南台駅を中心に住宅地が広がる、暮らしの中心地。

藤沢市の玄関口であり公共交通の結節点。駅周辺は商業地域有数の繁華街となっている。

古くから江ノ島詣に多くの観光者が訪れ、現在も景勝地として全国から観光客が集まる。



南北方向・東西方向とも大まかな流れは存在するが、軸として強く意識されているものは見られない

SCENE

東京オリンピックが行われる2020年を起点とし、2100年の風景を展望する。

	2020	2100
SCENE 1		
	たくさんの暮らしが集まる湘南台。建て替え時に減築され、接地性のある住宅になり、アメニティ向上・コミュニティ空間としての共用ガーデンが生まれる。	
SCENE 2		
	田園居住区の制定により、農業や園芸に興味を持つ若い人が増える。市街化調整区域の農地でレクチャーが行われるなど、世代間・市民間の交流が生まれる。	

PROPOSAL

江ノ島へと向かう３本の並行軸〈parallel AXIS〉

幅をもった帯状の軸として南北軸を強化し、都市の骨格を形成する

現在

引地川・境川・小田急江ノ島線・国道467号線という都市の骨格となり得る南北方向の軸は存在するが、軸として整備されていない。

■田園都市軸（小田急江ノ島線～国道467号線）

都市計画で田園都市軸内が田園居住区となり、減築が進み、農地やオープンスペースが広がっていく

市街地として残る湘南台・藤沢・江ノ島が拠点として際立つ

交通の多い国道467号線を片側２車線に拡幅することにより、南北の流れがよくなり、動線としての役割が強まる

「開発」ではなく
「豊かな住環境の創出」による
藤沢らしい都市の骨格・拠点強化

■自然浸透軸（引地川）

引地川は藤沢市の中心を流れており、
市内の緑とんどがその流域に入る。
市民の生活を支える基盤となる、暮らしに深く根付いた軸。

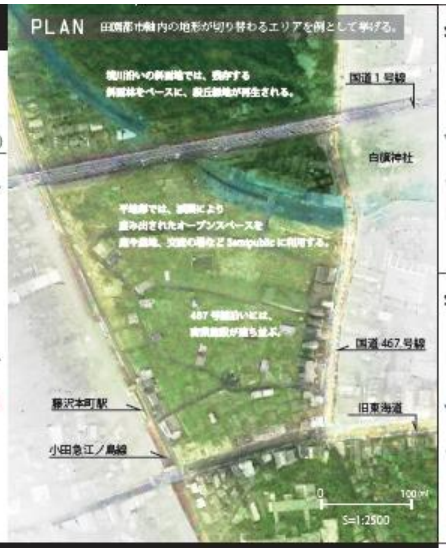
■交流境界軸（境川）

境川は海が入るなど海との関係性も高く、
市域にもなっている。
藤沢市と周辺環境とを機能的につなぎ、人々の
アクティビティを誘発する軸。

３本の平行軸が収束することにより、藤沢の景観を象徴する江ノ島が強調され、南北軸が浮かび上がる。

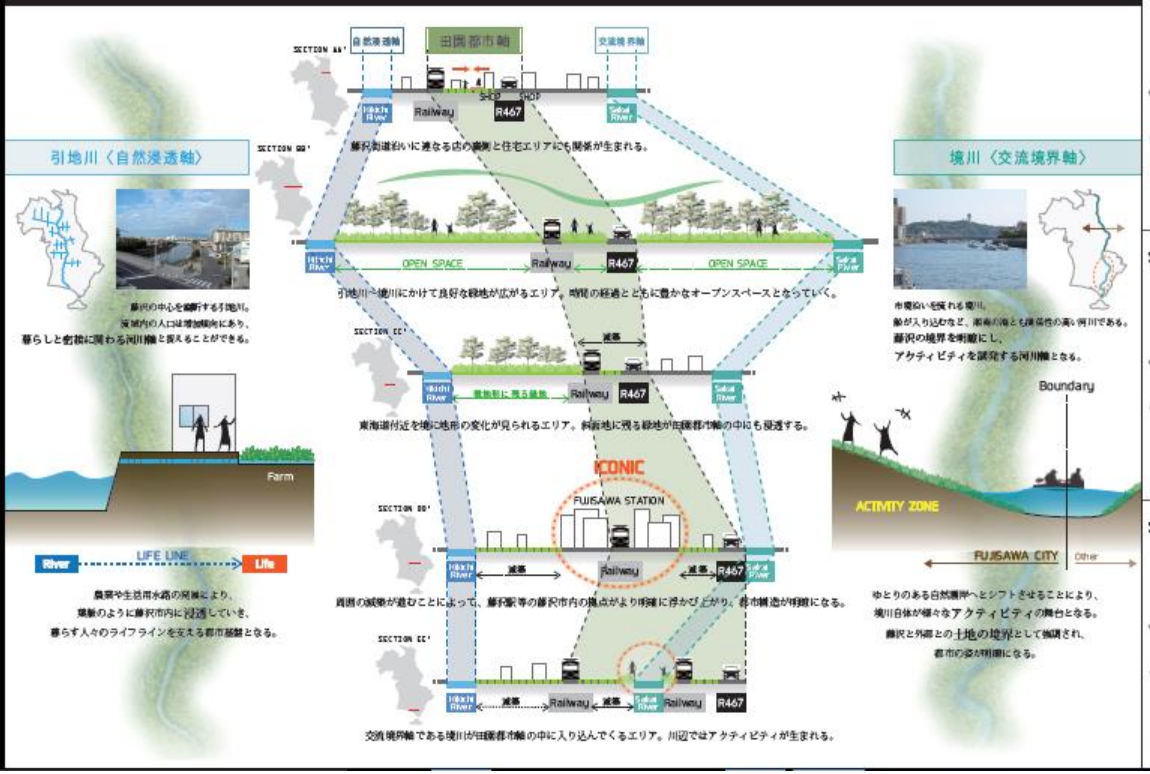
PLAN

田園都市軸内の地形が切り替わるエリアを例として挙げる。



SECTION

南北をつなぐ軸を起点として、藤沢に様々な風景が広がっていく。藤沢を流れる引地川と境川。性質の異なる２本の川の護岸をしつらえる。



SCENE 3

白旗神社へつながる藤沢南通周辺。丘陵の緑を背景に、セミパブリック空間ではお祭りなどの賑わいが広がる。

SCENE 4

田園都市軸内の減築によって、藤沢駅などの拠点へ向けて視界が抜けるようになり、曖昧としていた藤沢の都市像が明確になる。

SCENE 5

田園都市軸という骨格を持つことで、東海道本線の東西方向に通過する流れの中からも、藤沢市がわかりやすく、伝わりやすくなる。

SCENE 6

田園都市軸と交わる境川。自然護岸とすることで、アクティビティや交流が誘発され、水運利用をより活発にすることで、藤沢市周辺との繋がりが強化される。

SCENE 7

海岸緑地によって、田園都市軸、自然浸透軸、交流境界軸の3本の並行軸が江ノ島で収束する。海岸緑地は湘南海岸にくる人々の憩いの場となる。

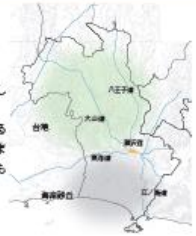
Background

かつて、六つの街道が縦横に走る交通の要衝として栄えていた藤沢。
遊行寺・江ノ島・大山は信仰の対象であり、街道はそれらの目的地を繋いで街道を通って人・モノが行き交い出会い、台地と低地の境にあった藤沢宿を中心として東西に、そして南北に繋がっていた。

▶庶民の信仰と物資の輸送で南北軸が形成されていた

現在、南北をつないでいた藤沢宿の中心性は失われてしまった。まちの骨格を形成していた街道は人・モノが往来するかつての姿をなくしつつある。
一方で地産地消を推進し、近郊農業が盛んで農家の意欲も高い藤沢だから生み出せる食の楽しみがある。豊かな自然を残す谷戸・市域を貫く二本の川、人々の目を楽しませるフジや桜・・・　これらの南北に点在する「いいところ」たちを、世代も地域も問わない食の楽しみが「行きたいところ」に変える。
そして南と北の人とモノはその境を中心にして再び出会う。

▶現代の人々を突き動かす食の楽しみが藤沢の南北をつなぐ



Concept

人とモノが動いて出会う、おいしい藤沢

かつての街道が持っていた「目的地を繋ぐ」という機能によって、点在する藤沢の「おいしい」を繋ぐ。「人・モノが移動し出会う」場所である街道を通って、様々な人が、食材が、動き出会う。この出会いが、「おいしい」を「おいしい！」へと変えてくれる。「おいしい！」がつくり出す笑顔で、藤沢をもっとひとつに、もっと魅力的に、もっとしあわせに。

◇出会いを促す２つのしくみ

1. ８の字周回と集結のサイクル
日々の小さな出会いは次も食べたい・会いたいを呼び
それらが積み重なって、８の字の中心の大きな出会いで賞を結ぶ

2. 人・もの・場所の新しい組み合わせが生み出す「おいしい！」
今まで出会わなかった人たちが出会い、力を出し合う事で
「この人と、このメニューを、この場所で食べたい！」「おいしい！」を生む

Vision

Step１：出あいの宿 - であいのしゅく -
各地域に人・モノが出会うための場所を整備。地域の食材が集まり、地域住民や農家の人々が「おいしい」を介して繋がり交流する拠点となる。

Step２：８の字道 - はちのじみち -
出あいの宿を繋ぐ８の字のかい道（街道／回遊）と、かい道を通り食材と人を同時に運ぶ８の字交通を整備。南北の移動が楽しくなる道筋となる。

Step３：回る廻る - まわるめぐる -
藤沢の食を全力で楽しむための要素を各拠点に配置し、１日、１週間、１か月、１年の異なる時間スケールで８の字道を回るシステムを構築。南北をめぐる食材や人と出会うことで新しい「おいしい」を知り、新しい「おいしい！」が生まれる。

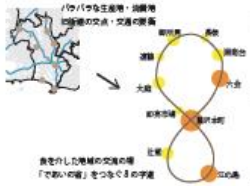
Step４：集まる広がる - あつまるひろがる -
市全域で起こっている日々の人・モノの移動と出会いが集まる場を設定。異なる時間スケールの中で蓄積された出会いが８の字の中心でさらにあたらしい出会いを生む。市全体が一体となって生まれた活気は再び日々の移動・交流を広げていく。

Step５：生まれ変わる南北軸
各 Step の「おいしい！」が動機となり、回る巡ると集まる広がるを繰り返して、８の字は強く太くなる。そしてかい道上だけでなく周辺にも波及する。人もものも南北関係なく移動し「おいしい！」が生まれつづける。こうして数年、数１０年かけて新しい魅力的な藤沢の南北軸を形成していく。

Project

■現代のかい道　８の字道

地域の食と輸送の中心かつ他地域や市外との接続点となる拠点、「出あいの宿」を整備し、拠点には食を介した交流の場とする。
「出あいの宿」をつなぐように南北を貫く「８の字道」を通し藤沢産食材の輸送と市内の人の移動を同時に行う。道路の修繕も行い、移動を促進するような走って気持ちの良い道を作る。



■年に一度のおいしい藤沢まつり

年に１度、藤沢宿を中心においしい藤沢まつりを開催し、日常の取り組みがすべてイベント仕様となり藤沢宿に集結する。各拠点が持ち回りでパートナー拠点となって、第２会場として地域の特色を活かしたイベントを行い、市内の移動を生み出す。地域住民は地元でのまつり開催を楽しみに、積極的に運営に参加する。
まつりで出会った新しい「おいしい！」「楽しい！」は、普段の活動をより活発にする。

■８の字道をめぐるもの

拠点には藤沢の食を楽しむための様々な機能を配置し、それらがそれぞれ異なる時間スケールで８の字をまわる。地域住民、観光客、農家・漁師、学生、高齢者、子ども、様々な人々が「おいしい」を動機に力を出し合い、食の楽しみを共有する。そして人々はまだ見ぬ「おいしい！」を求めて８の字を移動し、各地で様々に出会い交流することで藤沢がひとつになる。

1 **農産物集積機能**
各地で収穫された農産物は近くの拠点に集めてバスに積み込まれ一括して運ばれる。
負担の軽減と効率化、交通流滞の解消、生産者と市民や観光客との接点が生まれ、藤沢の食材への理解が深まる。
バス・運転会社
バスの運行
８の字道の維持管理

2 **小さな交通**
各拠点にはシェアサイクルなどの小さな交通を配置し、拠点から離れた郊外の直売所や市民農園などへの足とする。
また各地に多く散在する歴史的・地理的な地域資源をめぐるサイクリングロードを整備し、周遊を促す。
ランナー
８の字道整備への協力

3 **電子掲示板**
各拠点や主要な観光地に電子掲示板を配置する。市民や観光客が自由にイベントや季節のおすすめスポット、おいしいお店や楽しいひとときの写真などの情報を書き込むことができ、掲示板同士で共有されて観光客や市民の移動のモチベーションとなる。
観光客
新たな魅力ある場所の発見

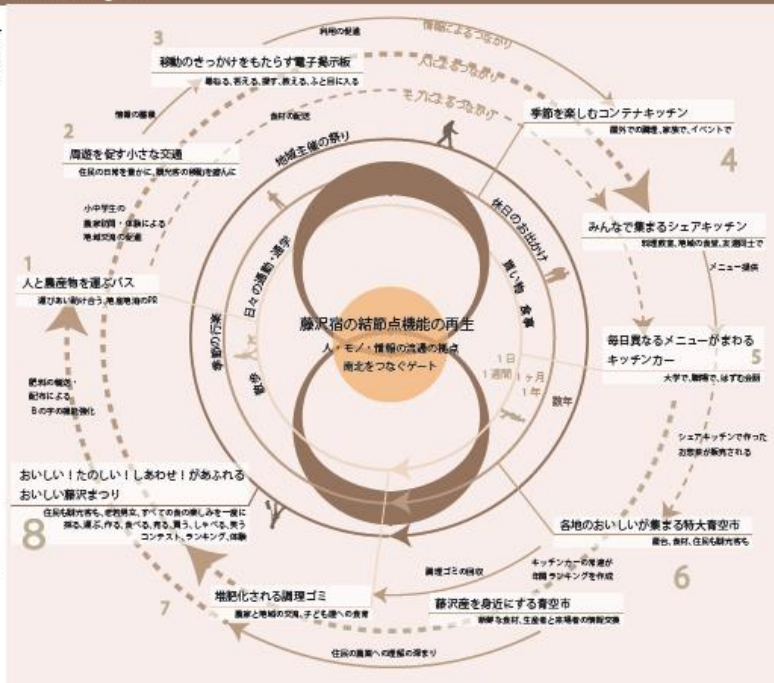
4 **シェアキッチン**
地域の人々も観光客も利用できるシェアキッチンを空き家や公民館などの既存施設を利用して用意する。
常設のキッチンの他、月に１度週末に移動式のコンテナキッチンを配置し、季節を感じられる場所で料理を楽しむことができる。地域コミュニティの中心となるだけでなく、世代・地域を超えた交流の場となる。
主婦・地域のサークル
夕食や惣菜の提供
農家
漁師・料理教室

5 **キッチンカー**
出あいの宿付近の大学やオフィスなど、人の集まる場所に藤沢産食材を使ったキッチンカーを配置する。キッチンカーは全５種類、月曜日から金曜日まで日替わりで５か所の拠点を巡わる。旬の食材により季節を感じられるとともに藤沢食材に対する理解が深まる。
大学生
メニューの考案
主婦・地域のサークル
調理販売

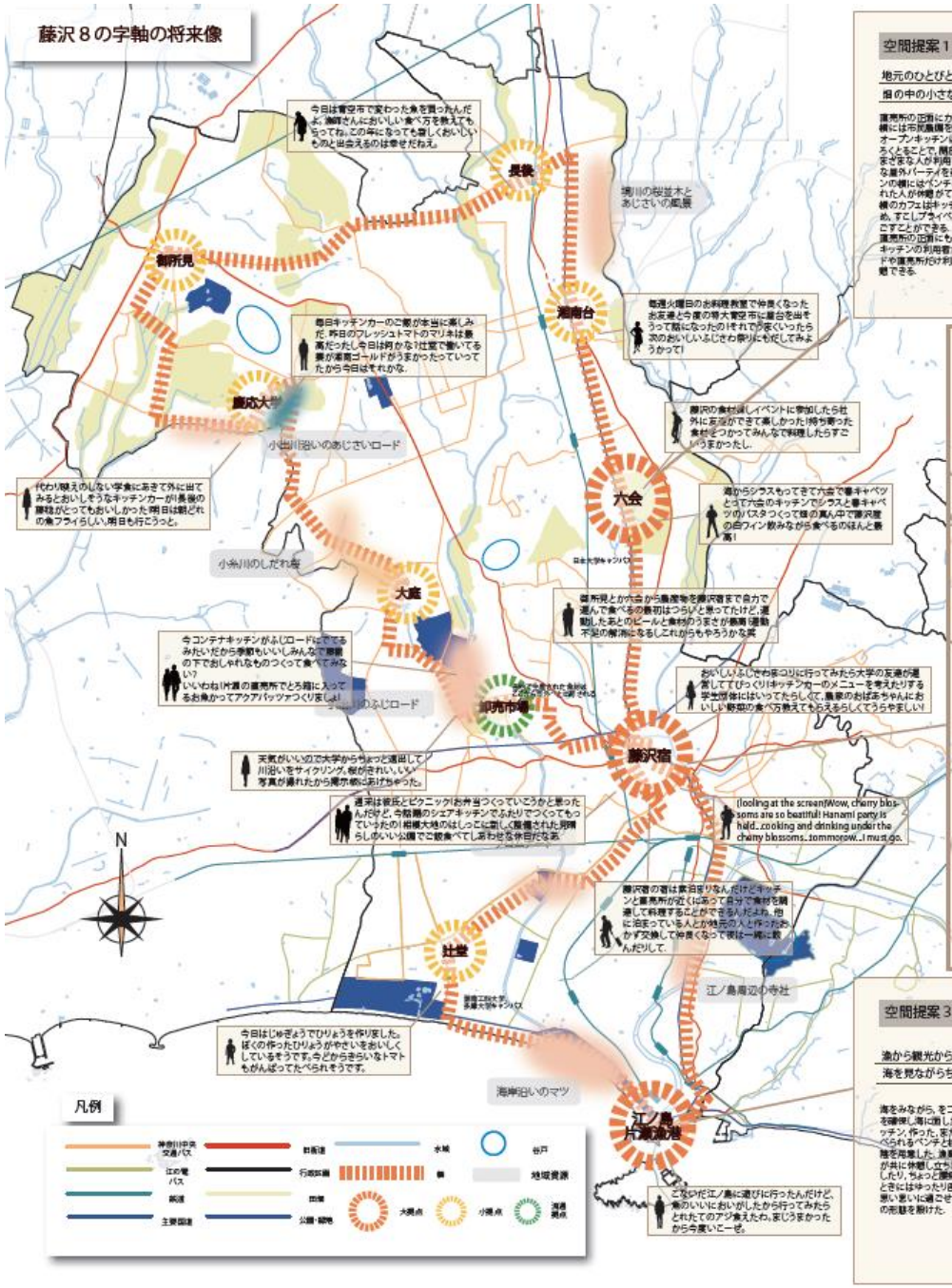
6 **青空市**
各拠点の直売所と連携し、週に１度「出あいの宿」で青空市を開催する。各地の食材が集まし、藤沢産食材を知ることが出来る。開催日以外に直売所に出向くなどの移動を促進し、生産者や他の住民との情報交換を可能にする。
毎回どこかの拠点で特に大きな青空市が行われ順番も出店される。特大青空市は１か月毎に８の字をめぐる。
中高生
青空市の運営協力
市内の飲食企業・サークル
青空市への出店

7 **堆肥化**
調理の際にでる生ゴミを堆肥化し農家に提供することで、環境に配慮した有機農業を推進する。キッチン・オープンスペース・学校で出た生ゴミは週に１度のペースで各拠点に回収されたい肥化された後各農家に配布される。小中学校と連携し農業への理解や後継者の育成に役立てる。
小中学生
堆肥づくりの手伝い

System&Diagram



藤沢８の字軸の将来像

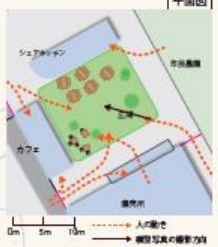


空間提案１　六会直売所

地元のひとびとに愛される

畑の中の小さな広場

直売所の正面にカフェとオープンキッチンを、横には市民農園を配置した。
オープンキッチンは壁をつくらず開口部をひろくとることで、開放感のあるつくりとした。さまざまな人が利用でき、バーベキューや小さな屋外パーティを楽しむことができる。キッチンの横にはベンチを配置した。農作業につかれた人が休憩ができ会話することができる。
横のカフェはキッチンよりも閉じたつくりのため、すこしプライベートで落ち着いた時間をすごすことができる。
直売所の正面にもベンチを配置して、カフェやキッチンの利用者だけでなく、ジューススタンドや直売所だけ利用するひとたちも自由に休憩できる。

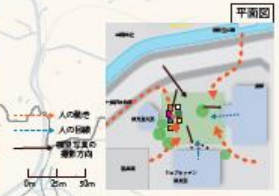


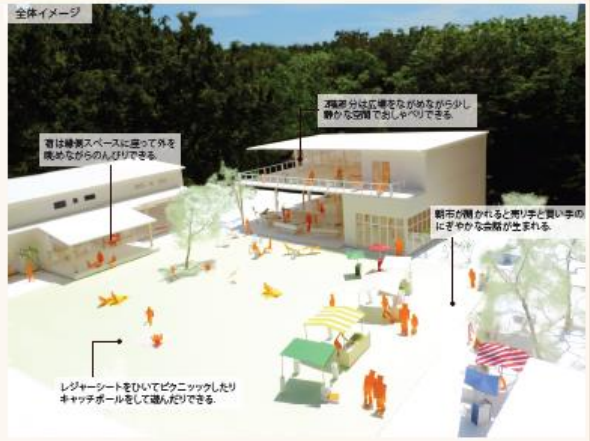
空間提案２　藤沢宿

地元のひとびとに愛される

地元のひとびとに愛される

８の字の中心らしく大きなスペースをとり、まわりに市場、キッチン、宿をとりかこむように配した。オープンスペースは子ども達の遊び場やピクニックに使われ三方から眺められる他、イベント時にはテントを並べて市場にも、テーブルを並べてレストランにもなる。
普段は菅空市・キッチンが賑わい、農産物の朝下ろしも行われるほか、交通の結節点としても機能し。市外から来た人やバスを乗り換え人、シェアサイクルを利用する人も立ち寄る。
イベント時には正面の公園・神社と一体となってより大きな広場となり年に一度のおいしいふじさわまつりでは藤沢商店街街も巻き込んで一体がお祭りムードにつつまれる。





空間提案３　片瀬江ノ島漁港

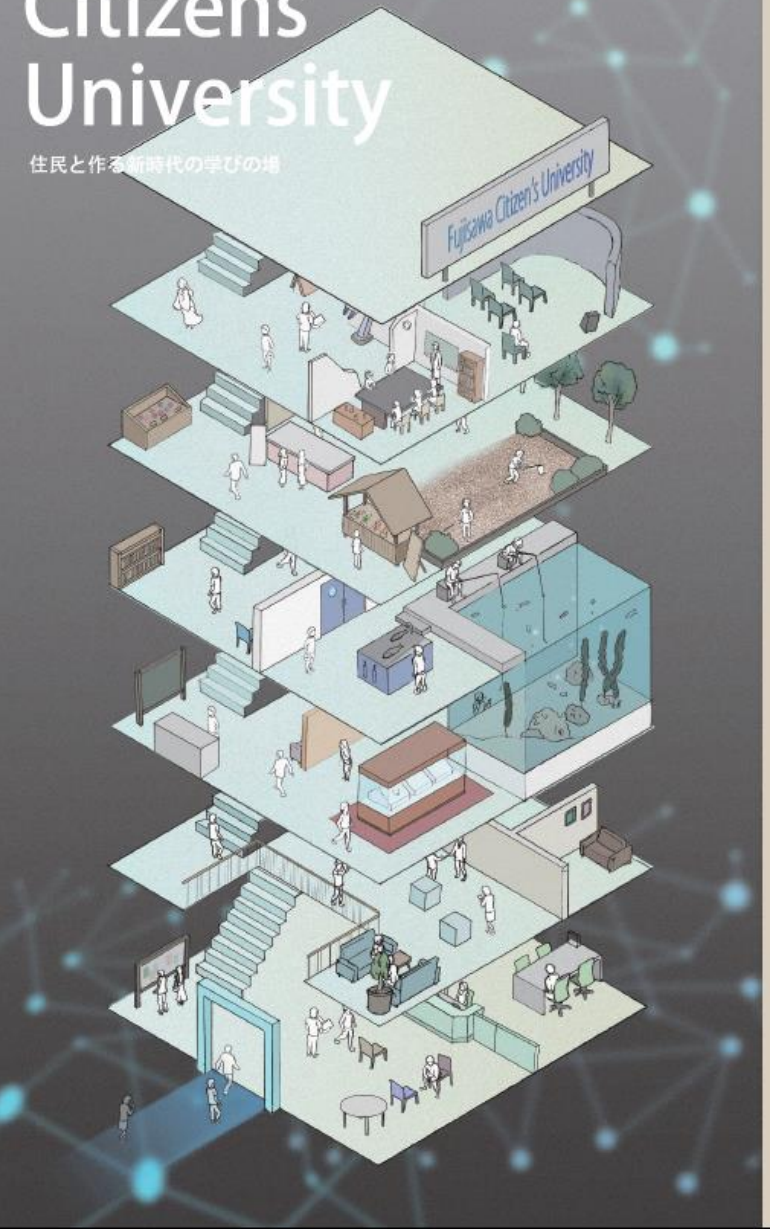
漁から観光から

海を見ながらちょっと一息

海をみながら、をコンセプトに海までの動線を確保し、海に面した大きな開口部を設けたキッチン、作った、家たは買った料理を座って食べられるベンチとも、強い日差しから逃れる日陰を用意した。漁業関係者、地元の人、観光客が共に休憩し立ち飲みしながらバーベキューしたり、ちょっと腰掛けて雑談をしたり、あるときにはゆったり座って海を眺める、など人が思い思いに過ごせるようにベンチと机に複数の形態を設けた。

Fujisawa Citizens' University

住民と作る新時代の学びの場



Research and Proposal

01. 人・地域のつながりが軸となる

藤沢市の調査を通じて各地区にあるコンテンツ、アクティビティの充実度、並びに個性豊かな地域性を知ることができた。しかし、藤沢市は"海辺の街"としてのイメージが強いがゆえ、一部の魅力が見えづらくなってしまっているのが現状である。これらを受けて新しい南北軸を作るにあたって藤沢に必要なのは、街が元来持つ魅力を再編し、人々に発信していくことにより様々な人が北から南へ、南から北へと動くようなプログラム作りであると感じた。プログラムにより南北間に人々の新しい流れが生まれ、今まで関わることが少なかった地域、人とつながりが生まれるようになる。**人・地域とのつながりはやがて新たな藤沢の軸**となる。

03. 藤沢市3つのエリア分け

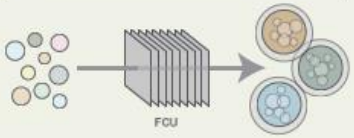
藤沢市は『**文化・農能**』の街である湘南台を中心とする北部地区、『**酪農業、自然**』を中心にできた中部地区、藤沢、江の島など『**海**』を中心に発展した南部地域の３つに分類できる。４０万人都市としてこの魅力の多様さは特有であり今回の提案の中心となると考えた。

02. MAP

藤沢市全体地図 S=1/50000

Management and System

04. 藤沢市民で作る藤沢市民大学



藤沢市内にある様々なコンテンツやアクティビティをまとめて発信していくシステムとして、**藤沢市民大学（以下ＦＣＵ）**を提案する。このシステムにより、今までは地域内に埋まっていた魅力や地域単位で行なわれていた活動を藤沢市全域に発信することが可能となり、新たなつながりが生まれる。

05. 文化・農・海3つのキャンパス

プログラムを支援するハブキャンパスとして、地域区分に基づいた**「文化・農・海」の３つのキャンパス**を小田急江ノ島線沿いに設置する。地域の拠点として、魅力を発信していくと同時に、今までは分散していた活動を束ねる施設として動く。近隣地区住民の集いの場ともなる。

06. 3つのキャンパスがもたらすつながり

藤沢市内に配置された３つのキャンパスでは地域の特色に富んだ講座が開講している。各キャンパスでしかできない体験を求め、人々は北のキャンパスへ、南のキャンパスへと足を運ぶようになる。北から南、南から北へと人々は移動し、やがては**南北間に新しい人の流れの軸が生まれる。**

07. FCUの運営プログラム

ＦＣＵは市民に講義や体験を提供し、市民から頂いた参加費を元に運営を行っていく。講師は藤沢市内にある企業や大学の教授・学生、そして市民が務める。地元のための地元による大学を目指していく。

08. ネットワークを用いた統括

市内では現在も数多くワークショップ等が開催されているが、まとめたサイトが存在せず、個別に発信しているという状況である。ネットワーク上にもホストとなるシステムを構築し、市民大学を運営することで、既存のワークショップ等の情報もサイトに集積し、連携することでより豊かなプログラムを提供することができる。

09. 小学校を利用した広報活動

認知度向上のためのプログラムとして休日には小学校への訪問プログラムを企画。遠隔地に住むなどの理由で普段は訪れない人でも、地元の小学校を通してワークショップに参加することでＦＣＵに触れることができる。

10. FCUが育てる市民

海、農、文化といった多用な魅力を持つ藤沢市の良さをＦＣＵを通じて触れることにより、幅広い視野を提供できることはもちろんであるが、市民の藤沢市への関心を高め、"地元愛"も育むことができる。地元愛は海や川の環境保全、食べ物の地産地消、お祭りの継承といったことにつながり、市民主体で藤沢市が成長していくと考えられる。

Detail of campus

藤沢市全体地図 1:1/60000

Cultural Campus at SHONANDAI

街のなかで

湘南台に作る文化のキャンパス。ビルの立ち並ぶ駅前の風景の中、新築の建物を作るのではなく、子供たちの集まる施設である「湘南台文化センター」の機能を間借りする形で運営する。

外観パース：町のシンボルである湘南文化センターにキャンパスを置く。

地元文化と先端技術

文化キャンパスでは、湘南台文化センターや各地で行われていたワークショップ等のプログラムに加え、この地域に工場の構えるメーカーによる最先端技術の授業や藤沢の歴史を来訪するプログラムを展開。大人から子供まで今まで知らなかった藤沢の知識を得られる場所となっている。

Agricultural Campus at MUTSUAI

自然とともに

六会、善行の間の地区に作る農のキャンパス。畑と個人住宅が広がり大学キャンパスがそびえるこの地区に、それらとはまた違ったデザインコードで建物を設計し市民の新たな拠点とする。

外観パース：風と光を感じられる木造の校舎が昔の暮らしの疲れを癒す。

おいしい食事とのどかな自然

農のキャンパスでは、藤沢特産の野菜を育てたり、自然の中で体を動かしたりと豊あふれる地域の地の利を生かした屋外で学ぶ授業を展開。キャンパス近くにある日本大学の教授や学生を講師として専門性の高い授業を行い、農家、大学、市民一丸となって藤沢の“農”を育てていくこともこのキャンパスの目的である。

Marine Campus at FUJISAWA

海を感じる

小田急江ノ島線の片瀬江の島駅前に作る海のキャンパス。水場と駅前広場を見通せるよう円柱状の建物を設計。住民はもちろん観光客にも開かれた施設となる。

外観パース：ガラスの筒と川上のテラスが駅前に集まる人を引き付ける。

相模湾に育まれる

海のキャンパスでは広大な相模湾を舞台としたマリンアクティビティを中心に授業を展開。誰でも気軽に参加出来るプログラムを用意することで、藤沢の“海”の魅力を観光客にも存分に体感してもらう。住民と観光客の人がつながる場所にもなり、藤沢の PR も担う重要なキャンパスである。

Example and Future

11. アクティビティの参加例

「たまたま知ったあの講座を」現実にキャンパスに訪れることによって生まれる新たな発見。

参加者A：湘南台在住の主夫の場合

参加者B：湘南台在住の女性の一日

12. ＦＣＵのもたらす未来

大学を通じて育まれた地元愛、また、人と地域のつながりにより、今まで以上に市民が関わったまちづくりが可能となる。市民と藤沢市が一丸となって、より良い藤沢の未来を創造していくことができる。

プログラム例 B1：無機質の白い箱に、日常の風景が無機質となる
藤沢市の風景を再創造に充分で観察を開催する。

プログラム例 B2：小中高大の商業の新しい教育の在り方が創造される
小学校から大学までの一貫した藤沢の新しいキャリア教育

今までは、公が主導で行ってきた河川、公園、道路などの地理的要素の改修もこの提案によって住民同士がつながりを深め、より住民に近い形で行うことができるようになる。

プログラム例 B3：住民主導の河川整備計画
みんなのやりたいを実現する社会B：Ｏｔｅｓの河川整備事業

川を纏うくらし

かつて宿場として栄え、人と物が行き交う藤沢は様々な交流を生んでいた。
輸送の主役だった舟が、海からの荷や藤沢の商家からの荷を積み活気に満ちていた。

人々のくらしは川と共に栄えてきた。

しかし、時代と共に発展した鉄道によって川と共にあった賑わいは駅へと移り、開発によって保水・浸透機能を失った川は水害の恐れがあるとして人々からより遠ざかる一方となってしまった。
そこで私たち社会の変化と共に利用の減少した境川の河川空間に対し、川本来の持つ自然の機能を用いた新たな生活基盤を提案することで地域に寄与し、再び人々が行き交う風景和を彩り出すことを提案する。

■URBAN AREA

境川と共に栄えた藤沢宿

かつての藤沢は宿場として栄え、人と物が行き交い様々な交流を生んでいた。特に藤沢宿に沿って流れる境川には多くの河岸があり、舟運が盛んだった。町の賑わいと川の機能は密接に関わっていた。

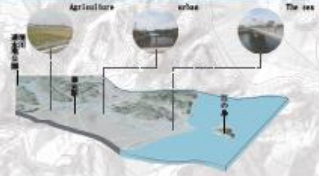
都市化の進行と現在

高度経済成長・鉄道の発達に伴い、現在の駅周辺の開発が爆発的に進んだ。人口が急増し、藤沢駅前に賑わいが集中した。交通の役割は鉄道に入れ替わり、駅前を単に通り過ぎるだけの空間に藤沢はまわっていった。

都市化と水害

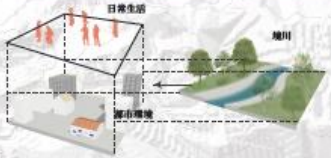
藤沢市特有の地形と急激に進んだ都市化によって雨水浸透が行われず、洪水の可能性を助長している。都市水害とライフスタイルの変化が人々を川から遠ざけ、境川は利用されずに川沿いの残余空間と共に地域に背を向けられた空間になっている

対象地　かつては人々の暮らしを支えた境川周辺



藤沢市の海・都市・農地の３つの異なる暮らしのエリアを貫き、現在は有効活用されていないが、川本来の自然機能を用いることで多様なアクティビティの可能性を持つ境川を軸に提案を行う。

提案　日常に川を組み込む　-減災機能を持った新たな生活基盤の創出-

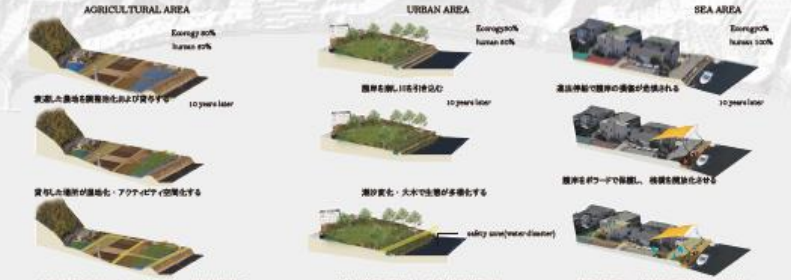


境川とその付近の残余空間を活用し、「災害を弱め、藤沢に住まい、訪れる人に憩わい・楽しみをもたらす新たな生活基盤を創出する。」

護岸の改変・雨水浸透等を積極的に行い、地域の特性人々のくらしを取り込みつつ、減災機能を備えさせる。河川は時間と共に都市の人々の絆・防災機能を強固にし、人の暮らしを豊かにする。

SYSTEM and TIMELINE

地形・生業・施設・水害のハザード毎から対象地を大きく３つのパターンに分け、パターンごとに提案を行った。

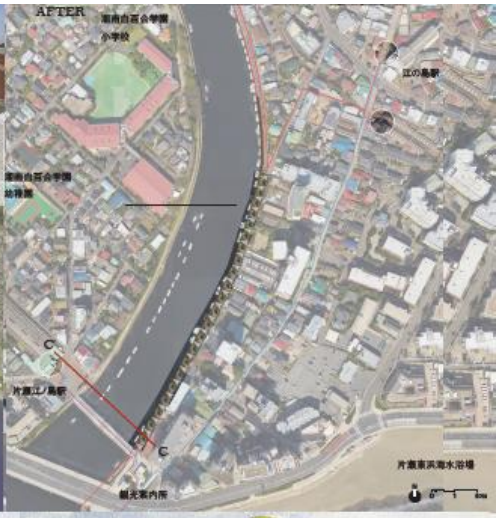


境川から河岸段丘・島地の区画が広がる景観をパブリックフットパスを用いて保全する。

都市から背を向けられた護岸を潮し、川へアクセスできるようにすることで、周辺施設の利用者も引き込むパブリックスペースを創出する。

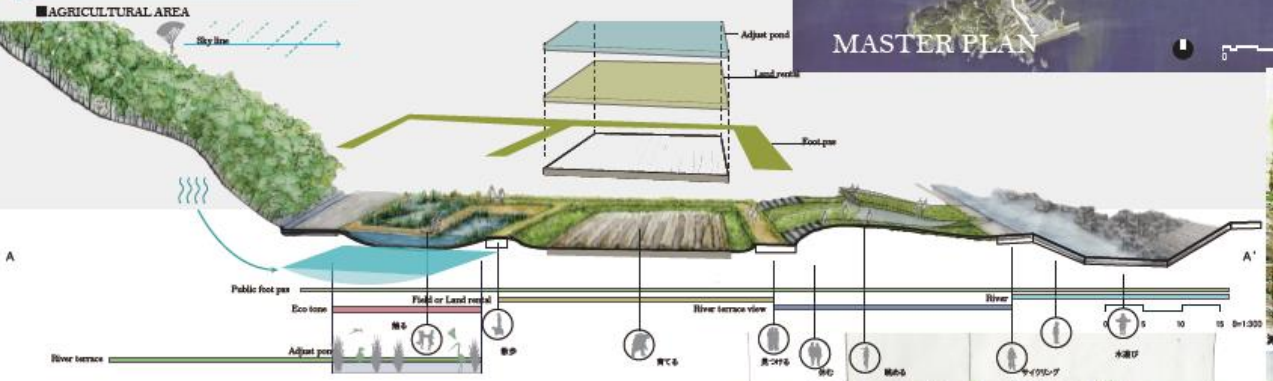
河口沿いの護岸を独立したボラードでプロムナードをデザインし、アクティビティを発生させ、新たな水辺空間を創る。

・違法停泊船が目立ち、災害時に護岸を傷つける危険性がある。
・観光客の利用が多い。
・サーファーなどがよく利用する空間。



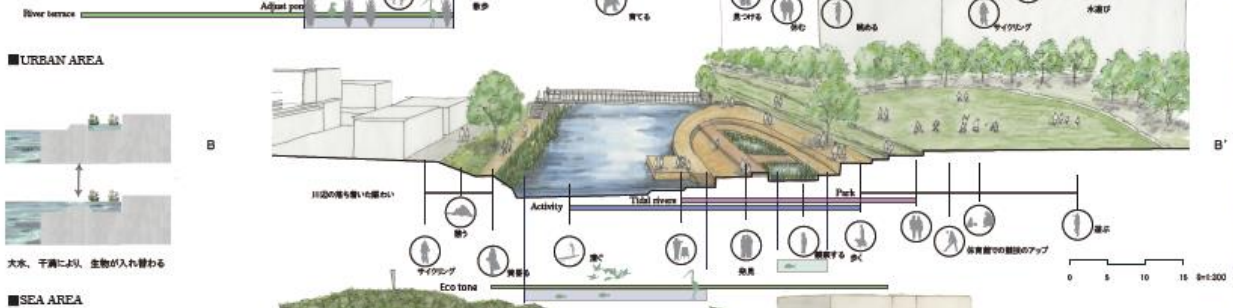
RELATION

■AGRICULTURAL AREA



減少する農地をフットパスに転換し、残存農家の経営を促進する。

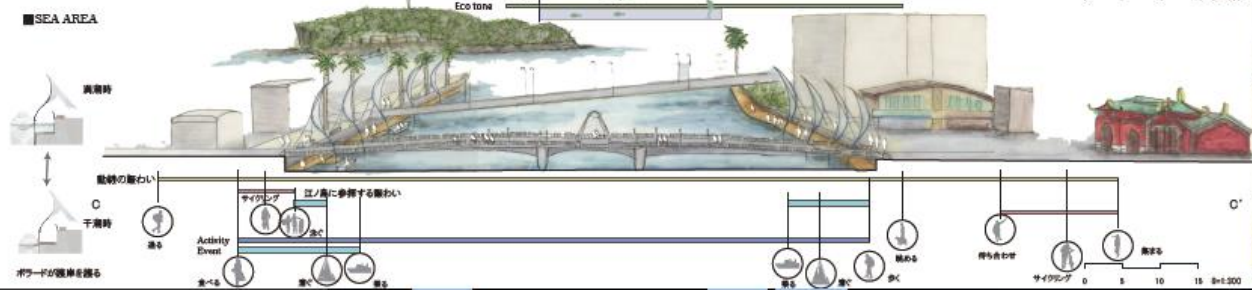
■URBAN AREA



大水、干潟により、生物が入れ替わる

大雨の際には普段使っている公園の一部が水没し、防災意識の促進と共に水害自体が風景化される様子を臨める。

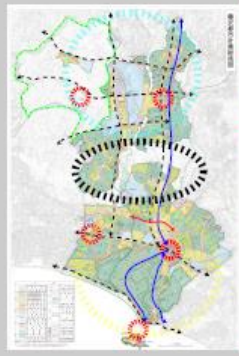
■SEA AREA



停泊している船から護岸を守るボラードは駅から江の島へ向かう人々を呼び込み、新たな賑わいをもたらす通りとして生まれ変わる。

都市に棲まう大蛇　～場所の多義的な可能性を生み出すデザイン～

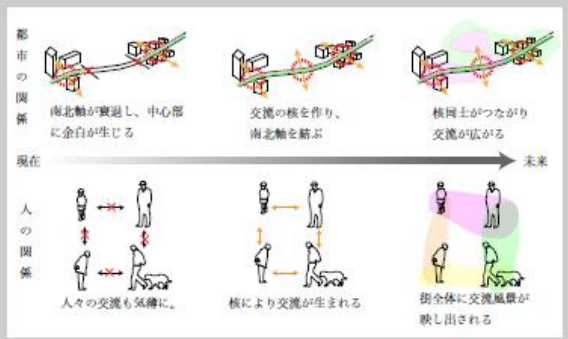
■背景　Background



近年の藤沢市の都市計画では、南部は、海辺の町として藤沢駅や江ノ島などの市街地として発展し、また北部の湘南台はこれからも人口が増えることが予想されており、商業系市街地や健康と文化の森地区などにより南部とは異なる発展を遂げていることがわかる。
しかし、近年の藤沢市では内陸部と海を結ぶ軸が衰えてきており、その結果南部と北部で独立した「まち」が形成され、藤沢市の中心部に余白ができてしまっているように思える。

本提案では、少子高齢化に伴う人口減少、空き地の増加によるコミュニティの弱体化または、中心部のシャッター商店街などの現代社会の問題を解決するとともに、宿場町の復興させることで南北に分断していた軸を段々と結び、南部と北部で共に「まち」を運営していくきっかけを生み出す空間を模索する。

■都市の将来像　Urban vision

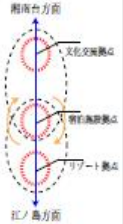


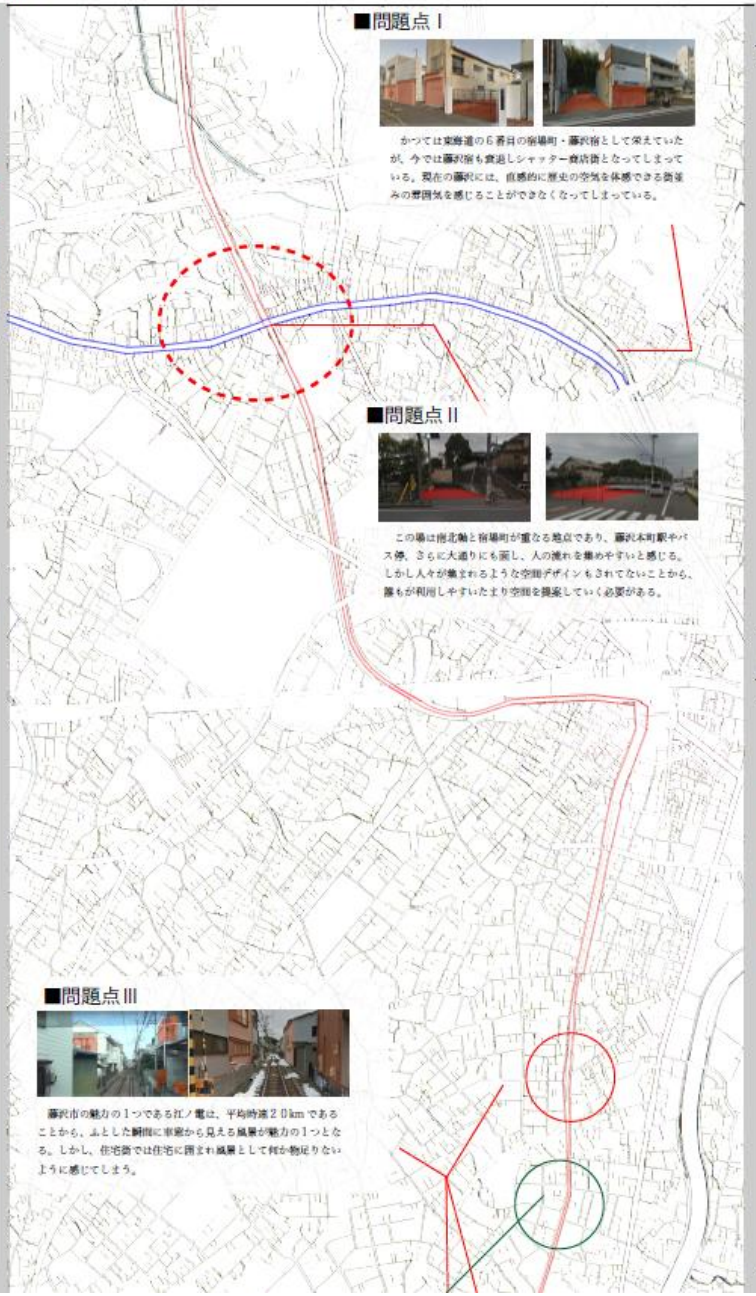
■提案コンセプト　Concept

〈都市の新たな骨格〉
～３つの核による人の流れの循環機能～

宿場町の街並みを保全するために藤沢市は、旧東海道藤沢宿周辺の地域を「街並み継承地区」に指定し、市の交流施設「ふじさわ宿交流館」の建設を進めるなど旧宿場町の趣を活用したまちづくりが行われている。行政だけでなく市民も伝統的な街並みを街の資源として認識しており、これからは積極的な保全活動が行う必要がある。

そこで、宿場町を復興させることで、藤沢市の新たな核とし、「文化交流拠点」、「リゾート拠点」、「宿泊施設拠点」という都市の３つの核を配置する。それぞれの核を結ぶ公共交通機関によって、宿場町を藤沢市の中心とし、「文化交流拠点」と「リゾート拠点」に対する玄関口として継続的に発展させていく。そうすることで、南北軸を結び今まで北部と南部で「独立したまち」を「１つのまち」として築くことを可能にしている。





■問題点Ⅰ

かつては東海道の６番目の宿場町・藤沢宿として栄えていたが、今では藤沢宿も衰退しシャッター商店街となってしまっている。現在の藤沢には、直感的に歴史の空気を体感できる街並みの雰囲気を感じることができなくなってしまっている。

■問題点Ⅱ

この場は南北軸と宿場町が重なる地点であり、藤沢本町駅やバス停、さらに大通りにも面し、人の流れを集めやすいと感じる。しかし人々が集まれるような空間デザインもされてないことから、誰もが利用しやすいよりよい空間を提案していく必要がある。

■問題点Ⅲ

藤沢市の魅力の１つである江ノ電は、平均時速２０km であることから、ふとした瞬間に車窓から見える風景が魅力の１つとなる。しかし、住宅街では住宅に囲まれ風景として何か物足りないように感じてしまう。

■問題点Ⅰ　Problem Ⅰ

１、宿場町復興計画　～アートスポットとしての賑わい～

fig1, 周辺と重ねて眺める

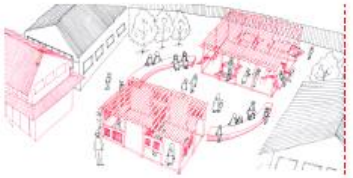


fig2, 変幻自在なアクティビティ

この場は東海道五十三次の浮世絵でも残されているようにアートスポットとして栄えていたのだとわかる。なので宿場町を活性化させる一つの魅力として空地を利用したアートスポットとしての場を提案する。日常的には藤沢宿や遊行寺を観光している人々が藤沢市の神社仏閣や街並みを絵を描くスペースとして利用することで「周辺と重ねて眺める」という行為を誘発し、名所の領域性を重層的に拡大させる。お祭り時などの非日常時では、この場を地域の人々や観光客が描いた絵を展示するスペースとしても利用できる。一年で変わりゆくアクティビティごとの利用方法を考える。

■問題点Ⅱ　Problem Ⅱ

Ⅱ、宿場町復興計画　～藤沢市の新たな玄関口として～

fig3, 藤沢市の新たな玄関

fig4, シンボルツリーに寄り添う

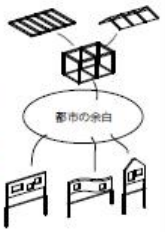
いつも誰かと出会える、話せる、過ごせる。そういった空間を藤沢市の玄関口として提案することで地域の人々、観光客などのニーズに応えていく。
シンボルツリーの設置をすることで、待ち合わせ場所としての新たな空地の使い方となり、藤沢市のランドマークとなる。また様々な人々が利用することから壁の形を「ジュウジ型」とし大きな広場空間をいくつもの小空間として利用することが可能になる。ただ空間を分節するだけでなく壁に大きな窓を設けることでいくつもの小さな空間を緩やかに繋ぎ、その広場空間の賑わいは一体となることを期待している。

〈余白の空間化〉

～自由な発想によるアクティビティ～

藤沢市における空き家や空地の存在は、防犯、防災、衛生、環境面の悪化などにより、近隣住民や第三者に不利益や損害を与えるだけでなく、新規移住者の阻害などの土地利用の非効率化を生じさせ、地域の活力や魅力の低下にもつながるだろう。そのため、空き家や空き地を適正に管理し、これらを地域資源ととらえ、利活用を推進していくことが必要となってくる。

そこで、機能していない空き地などに柱や枠組みだけを設けて明確な利用方法を提示しないことで、地域住民はその利用方法を自由に発想し、様々なアクティビティが生まれることを期待している。その結果、地域の活動を街に映し出す装置として生まれ変わる。



〈都市の経年変化〉

～時の流れとともに都市に馴染む～

これからの藤沢市には、活気ある藤沢らしさの特化、良好な都市環境、具体性の発揮が必要であるように思える。また自主的・積極的に活動をする市民が増加することが藤沢らしさ、活気の一環となる。

都市に新たに柱や枠組みだけを設けることで時間が進むごとに、「植物が柱に巻く」、「イベントのポスターを貼る」、「近所の子供の落書きが残る」、「壁の劣化などを目にする」などの時と共に変化する外観をつくりあげることが可能になる。そうすることで、 その土地に暮らす人々の生活を表出し個の活動が街へと広がり、新たな風景を形成され次第に都市に馴染み藤沢らしさという新たな記憶として定着することを期待する。

経年変化する壁

0年目 → 15年目

■問題点Ⅳ

ProblemⅣ

Ⅲ、南北を彩る植物たち ～江ノ電沿いの植栽計画～

線路沿いに点在する花壇や菜園は、沿線生活者が軌道敷を占有した結果であるが、車窓の風景を楽しませ、緑、手入れをしている人々、江ノ電の組み合わせが、街の喧騒の中での落ち着いた瞬間を演出している。その間に壁を挿入することで、安全面を確保しつつ、額縁のように向こう側の景色を切り取って、見る位置によって少しずつ印象の違う「絵」を見せている。また線路の途中に建てた格子状の柱にフジを巻かせることで藤の花のトンネルを提案することが可能になる。

住宅地と住宅地を結ぶ植物の軸とし植栽計画をすることで、今までは海辺のイメージであった藤沢市に新たな魅力の一つとなることを期待する。

fig7, フジのトンネル

fig8, 都市にあらわれる額縁

■問題点Ⅳ

藤沢市の魅力の１つである江ノ電は、平均時速２０km であることから、ふとした瞬間に車窓から見える風景が魅力の１つとなる。しかしこのように両線が空いている場では少し呆気ないように感じる。そこで、藤沢市の南北軸を彩る植物の軸を提案していくことで色あざやかな空間を提供することができる。

■問題点Ⅴ

江ノ電沿いにあるシャッター商店街である。この通りはお祭り時などは神輿が通るなど多様なアクティビティが生じる可能性を持っている。しかし人が留まれるような仕掛けもないことから賑わいもなく、寂れてしまっているように感じる。

■問題点Ⅲ

ProblemⅢ

Ⅳ、車窓からの風景 ～住宅街の活動が都市に滲みだす～

fig5, ともに育てる街並み

fig6, 個から街への継承

今まで個の生活を外部に出さないように設けられていた壁は、江ノ電という特色によって地域の活動を映し出す装置として生まれ変わる。一人一人が彩ってきた街の風景の一部である壁が個人から街に継承された時、地域で共有され、新たなコミュニティを風景として街に映し出す。

街の景観を崩さないように壁の形は「イエ型」とし、そこにできた空地では地域の人が共同で畑や植物を育てたり、中庭的な空間として利用したりと様々な交流を生み出し、車窓からの風景として見ることで、普段通ることのない住宅街への地域の人や観光客の愛着をわかせ、南北軸の魅力の１つとなる。

■問題点Ⅴ

ProblemⅤ

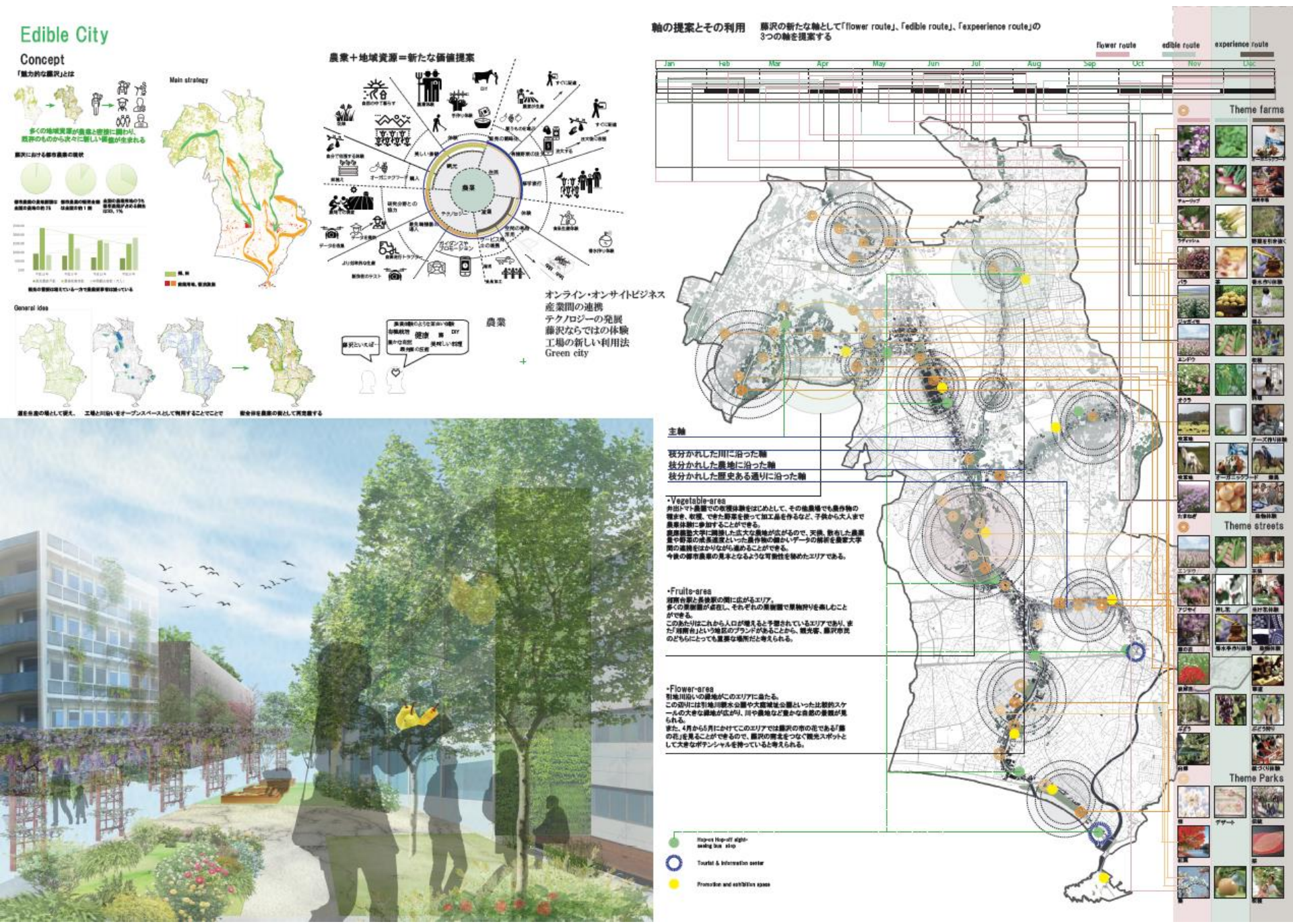
Ⅴ、車窓からの風景 ～商店街の賑わいが都市にはみ出す～

fig9, 店・道・電車の三位一体

fig10, 都市にはみ出す活気

空き店舗や空地が多い空間は、人と空間の関係がうまくいっていなく、時代とともに増加している。そこで本提案は、新たに建物を建てるのではなく、これらの空間に何気なく歩いている人々が留まることのできる仕掛けを設け再編していく。

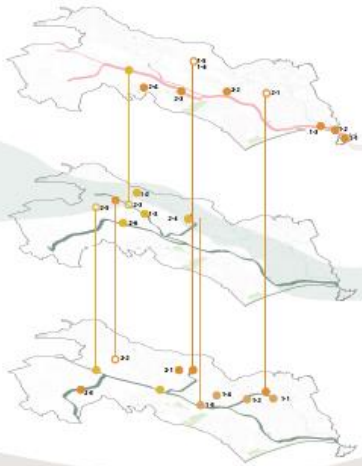
ここでの壁の形は「キョクセン型」とし店舗の商品棚などが湾曲している部分に収まるように配置し、道に対して店舗のアクティビティがせり出し、道と建物が一体的となる空間を作り出すことが可能になる。またここでは壁の幅を厚くし、高さを50cm 程度にすることでカウンターや椅子などの異なる使い方により、人々の留まることを期待する。


Edible City
Concept
「魅力的な藤沢」とは
多くの地域資源が食産と密接に関わり、
既存のものから次々に新しい価値が生まれる
藤沢における都市農業の現状
Main strategy
General idea
農業＋地域資源＝新たな価値提案
農業
オンライン・オンサイトビジネス
産業間の連携
テクノロジーの発展
藤沢ならではの体験
工場の新しい利用法
Green city
軸の提案とその利用
藤沢の新たな軸として「flower route」、「edible route」、「expeerience route」の
3つの軸を提案する
flower route
edible route
experience route
Jan
Feb
Mar
Apr
May
Jun
Jul
Aug
Sep
Oct
Nov
Dec
Theme farms
Theme streets
Theme Parks
主軸
枝分かれした川に沿った軸
枝分かれした農地に沿った軸
枝分かれした歴史ある通りに沿った軸
•Vegetable-area
•Fruits-area
•Flower-area
Tourist & information center
Promotion and exhibition space

実際の旅行風景

ペルソナの設定

若いカップル(大学生)、小さい子供のいる夫婦、健康意識が芽生え始めた30～40代の女性、オーガニックフードに興味のある20代の女性、SNSなどで写真を共有する意識のある20代前半の若者etc…



若いカップルの場合@4月

1日目…江ノ島と鎌倉市観光へ
2日目…市内を散策

1-1 江の島
1-2 観光センター
1-3 藤棚の下で写真を撮る
1-4 観光バスに乗って街を移動する
1-5 農家が特別に畑を提供してくれる
1-6 有機栽培野菜を自分たちで調理して食べる
2-1 歴史的な道
2-2 Vegetable Street
2-3 バラのある通り
2-4 鎌の花の公園

地元の家族の場合@3月

1日目…有機野菜を食べ
2日目…農場で遊ぶ

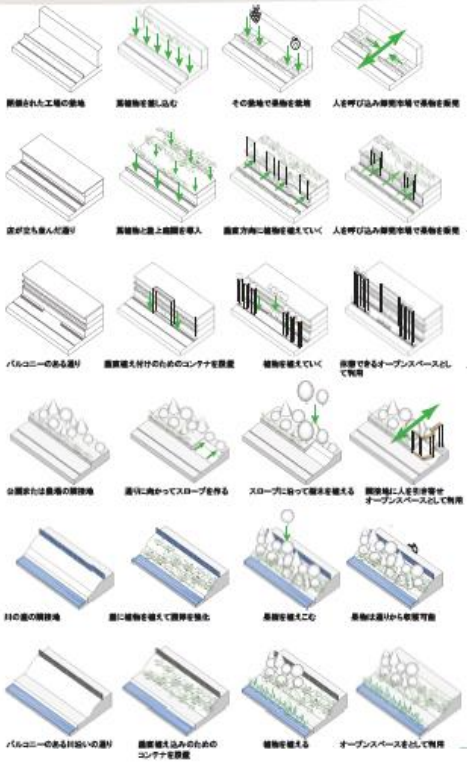
1-1 オンラインショッピングングで有機野菜を注文
1-2 自宅
1-3 ぶどうのある通り
2-1 湘南台近くの自宅
2-2 アジサイストリートへ
2-3 コミュニティーファームへ
2-4 鎌倉駅へ
2-5 Vegetable Street

2人組の中年女性の場合@11月

1日目…フラワーアレンジメントの教室に行って、そのあと通りをぶらぶらする
2日目…互いがその会色を体験して、そのあとオーガニックフードを食べる

1-1 鎌沢駅
1-2 農場体験
1-3 有機栽培野菜を自分たちで料理
1-4 Vegetable Street
2-1 互いが農場
2-2 オーガニックファーム
2-3 ぶどう農園

Open Space Strategies



路（みち） Each of Road.（それぞれのみち） Each of History.（それぞれのあゆみ）

人のあゆみ～過去～現在～未来～の Design
藤沢の「キオク」を川路で紡ぐ

「路」には「足」- あゆみ - と「各」- それぞれ - 2つの意味がある

「ひとつ」の川路のデザインは文字通り「それぞれのあゆみ」を生み出した

「道」のキオクを持つ藤沢市は新たな「路」をあゆむ

4つの路

藤沢市のもつ特徴を生かした路として文化・風景・歴史・生活の4つの路をつくりだす

- Culture 文化 — 宗教文化を繋ぐ路
- Landscape 風景 — 鳥の風景を感じる路
- History 歴史 — 東海道の歴史に繋る路
- Life 生活 — 市民の生活を輝かせる路

風景の路 Landscape 潮騒をする美しさへ

この路は風景を観せ風景を保つ

観光都市としての藤沢市において、元来持つ鳥の風景や人々の生活の営みまでを風景の路としてデザインする。観るための風景ではなく訪れる人々の活動によって風景が保たれる仕組みをつくる。

風景の構造

風景は土地の営み、生活の営み、人の営みという3つの要素によって成り立っている。それらの要素を綜合化した仕組みをデザインし風景を造る。

観光としての風景デザイン

湘南野菜や海の幸といった魅力を持つ藤沢市において、江ノ島や都市部に集中する観光客を、地産地消やグリーンツーリズムといった取り組みに引き込むことで、鳥の風景を観せるとともに消費を促し持続可能な風景とする。

風景の構造図

- 食 → 人の営み
- 健康 → 生活の営み
- 風景 → 土地の営み、景観

食・健康は風景によって支えられている
→ 風景 を守ることが食の発展につながる

食
健康意識
地産地消
グリーン・ツーリズム
農業・漁業から都市景観を構築

移動のデザイン

- Automobile / Train / Bus / Bicycle / Walk — 観光地としての機能を持つ藤沢市にとって移動のデザインは重要な意味を持つ
- 自動車、電車、バス、自転車、徒歩といった既存の手段に超小型モビリティを加えることで現代における宿駅伝馬制度の構築を図る。

＋α → 超小型モビリティ

超小型モビリティのある社会

環境性能に優れ、地域の手軽な移動手段となる。
軽自動車よりも小さい二人乗り程度の三輪、四輪自動車である。
通常の自動車に比べ1/6程度の少ないエネルギーで済み
ほとんどが電気自動車であることから「低炭素社会の実現」につながる。

超小型モビリティ

超小型モビリティの必要性

「都市部での効率的な交通手段」

少人数や短距離で移動において小さな車体を生かした走行が可能なため、渋滞に巻き込まれるリスクや狭い街路における不安を解消できる

「観光・地域振興」

観光客の移動の手段としての活用を目指すことで、移動範囲の拡大を図ることができ地域の活性化や利便性の向上につながる。

「高齢者や子育て世代の移動支援」

自動車の運転に不安を持つ高齢者の方や子育てをする父母の移動の手段としても効果を発揮する。小さな車体や日常の利用にぴったりな速度（最高速度 80 km/h）は自動車の利用が多い藤沢市にとって新しい選択肢に大いになりうる。

超小型モビリティ
＋拠（よりどころ）ネットワーク ＝ 現代における宿駅伝馬制度

江戸時代の宿駅伝馬制度

宿場町（宿駅）は、荷物の輸送などの場合、原則として宿駅ごとに継ぎ送るリレー方式をとることになっていた。このことを伝馬制度という。各宿場は伝馬朱印状を持つ公用物資は無償で次の宿まで輸送することを課せられ、そのかわりに旅客を宿泊させる権利と一般の物資輸送で駄賃を稼ぐ権利を持った。

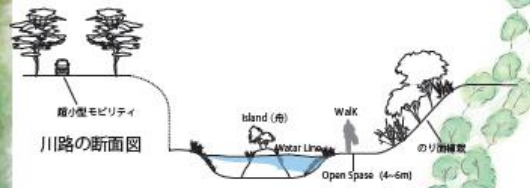
東西軸

川路のデザイン

現在の河川は三面コンクリート護岸によって自然環境がはぐくまれていない。
護岸をすることによって得られるメリットがある反面、自然的でなく生物が生きる環境として適切とはいえない。
そうした現状を踏まえ、川路のデザインにおいては自然河川の再現を目指す。
河川敷の土手の部分に超小型モビリティが通行できる制度を整え、水・空気・人の路として機能させる。
人々が川路を通りたくなるような印象を持たせるため、多様な生態系の創出や在来植物による植栽など藤沢市の - 土地の声 - を通る人々に聞かせる。

水辺空間

都市において水辺空間は貴重な資源である。水と親しみが持てるよう水面と同じレベルまで下りることができるようにし、小規模なオープンスペースを随所に設け人々の多様なアクティビティを促す。
過去に水路として親しまれた風景を再現するためデザインとして中島を造り、過去の在りし風景を感じさせる。



川路の断面図

生活の路 Life ちょっと幸せに

住居地域から都市部へと続く川沿いを利用した路。
日常生活での移動や買い物といったシーンにおいて超小型モビリティを活用した河川敷の走行により一般道での交通渋滞の緩和を図る。
川路のデザインによって魅力の高まった河川敷の空間は都市の中のオアシスとなり、通る人々にささやかな幸福を感じさせる。
- 新たな交通 - は - 新たな交流 - の場として機能するよう川路におけるオープンスペースの整備や滞留空間のデザインを行った。

I 川路のデザイン 超小型モビリティの提案
II 新たな交通の出現
III 交通が便利で快適に 交流が生まれ 話す、遊ぶ

拠点管理システム

- Point → 店、空地、空家、公共施設、公園、駐車場
- Line → 商店街、東海道、海岸線、川沿い
- District → 駅周辺、観光地、人が集う場所

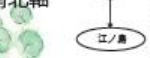
拠（よりどころ） ネットワーク

拠点管理システムの構築によって、藤沢市を点 -Point- ・線 -Line- ・地域 -District- の3つの要素 -Element- に分類。
このシステムの特徴は、特定の箇所に集中する交通の流れを街全体の拠点のネットワークによって観光地や主要道路で発生する慢性的な渋滞の解決を図る。

これら拠点を「よりどころ」と位置づけネットワーク化したものを「拠（よりどころ）ネットワーク」と名付けた。

現代における宿駅伝馬制度（交通ネットワーク）

南北軸



東海道の特徴である伝馬制度を現代版に再生させ都市の中に点在する拠点間を結ぶ南北軸のネットワークを構築する。
江戸時代の交通用具であった馬を、現代では超小型モビリティとする。
超小型モビリティは電気自動車のため環境汚染が少なく、江戸時代と同様に廃棄物を一切出さない資源循環型の社会システムとすることができる。
江戸時代の宿駅伝馬制度は宿場町ごとの乗り継ぎであったが、カーシェアリングを導入することで自由に拠点間を回避することができる。

歴史の路 History そこにある大切なもの

東海道 - 藤沢宿 -

かつてよりにぎわいの中心として人々の交通であふれた商の場であった。
引地川と境川に挟まれた旧東海道を歴史の路とし、歴史と郷土文化が集う拠点としての役割に加え、川と川をつなぐ東西軸の路としてデザインした。
歴史の路では、路沿いの店舗のデザインを歌川広重の東海道五十三次に描かれた藤沢宿の様子をモチーフとすることで過去に遡ったような雰囲気を味わえる。
かつての交通の要は、新たな川路の境川-引地川という交通の要を結ぶ唯一の路として蘇る。

リ・デザイン Re-Design

人々で大いに賑わった藤沢宿と東海道。
時代の流れの変化により現在はおさよさものが影をひそめてしまった。
しかし、新たな路の誕生によって古きものに光が射した。
肥沃な土壌 -History- と川路で育まれる新たな芽 -Future- は観光地となり訪れる人々に光を与える花となる。

3つのデザイン ～都市文化 交通システム 商の空間～

都市文化

軒下：江戸を想い出させる統一されたデザイン
店舗：人でにぎわう空間のデザイン

交通システム

馬留め：宿場町において馬を留める場所
→超小型モビリティを留める場所の設置
歩行空間：「軒下回遊」
建物に共通した軒を設計デザインを調和させ、軒下空間の活用を図る。

商の空間

食事処：食事を楽しむ休憩所としての役割
お土産屋：人が集まるから気軽に立ち寄れる場所

川路と歴史の路の関係図

文化の路 Culture 信じる気持ち - 信仰 - をつなぐ

願い - 宗教的なつながり 江ノ島弁財天↔遊行寺
想像 - 遊行寺や江ノ島の近さを想像する

江ノ島弁財天と遊行寺は東海道五十三次の絵にも描かれているように近い存在であった。また、高層ビルのない時代には江ノ島ー遊行寺間の眺望があったはずであるが、再び物理的な眺望を再現することは難しい。
しかし、精神的な近さを感じさせることは可能である。
文化の路は、江ノ島と遊行寺を共通の路でつなぐ。
この路を通れば必ず辿り着くという安心感を精神的な近さとしてデザインする。

人の想いを集める

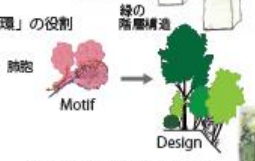
江ノ島と遊行寺という二つの宗教施設に挟まれた文化の路は藤沢市において特別な意味を持つ。
ひとりひとりが異なった想いを持ち、訪れ、祈るという行為をこの路は際立たせる。
木々の木漏れ日と美しい水面を眺めながら進む路は神聖な路を演出させる。
かつて江ノ島道を通り参詣した風景を再現する。

緑のネットワーク Green Necklace

「都市の肺」 空気を浄化する - 水と緑 -

緑地の持つ空気を浄化させる機能を動物の肺にたとえ「都市の肺」として位置付けた。
肺を構成する「肺胞」は表面積の大きさが特徴である。
肺胞の形態を - 緑の階層構造 - とすることで植栽のモチーフとした。

肺…「呼吸」と「血液循環」の役割



移動と電力のデザイン

再生可能エネルギーによる自家発電
超小型モビリティ
→カーボンレス＆サスティナビリティ

再生可能エネルギーと超小型モビリティを組み合わせることでカーボンレス、サスティナビリティ（持続可能性）を実現する。

- 循環共生 -

波力発電と超小型モビリティ等の電気自動車の走行によって街の経済が発展しそれによって波力発電のデメリットを消すというシステム

Wave Power 波力発電

海において波の運動エネルギーを利用して電力を得る発電方式
再生可能エネルギーであるが発電コストが高いというデメリットがある

発電と利用の概念図